



平成 23・24 年度 地域連携応援プロジェクト 成果報告書



目 次

◆巻頭言 「地域連携応援プロジェクト成果報告書」の発行にあたり	2
阿部 耕也 イノベーション社会連携推進機構 地域連携生涯学習部門長	

平成 23 年度 成果報告

1. Let's 能プロジェクト	
- (財) 静岡県文化財団「平成 23 年度伝統芸能普及プログラム」との連携 -	3
〈代表者〉小西 潤子 教育学部 教授	
2. 清水エスパルスと静岡大学との「三方よし」交流協定に関する提案事業	5
〈代表者〉水谷 洋一 人文社会科学部 准教授	
3. サッカーを活かしたまちづくりを推進する「エスパルスドリーム教室」	8
〈代表者〉塩田 真吾 教育学部 講師	
4. 「多文化共生」をテーマとした絵本読み聞かせプロジェクト	10
〈代表者〉矢崎 満夫 教職大学院 准教授	
5. 「ガイドマップ」で地場産業の魅力を再発見	
- 静岡市における産業遺産の振興を目的としたガイドマップ作成事業 -	12
〈代表者〉日詰 一幸 人文社会科学部 教授	
6. Hamamatsu 合同大学祭プロジェクト	15
〈代表者〉青木 徹 電子工学研究所 准教授	
7. 梅ヶ島大代における「ホームカミングデー」の実施	17
〈代表者〉富田 涼都 農学部 助教	

平成 24 年度 成果報告

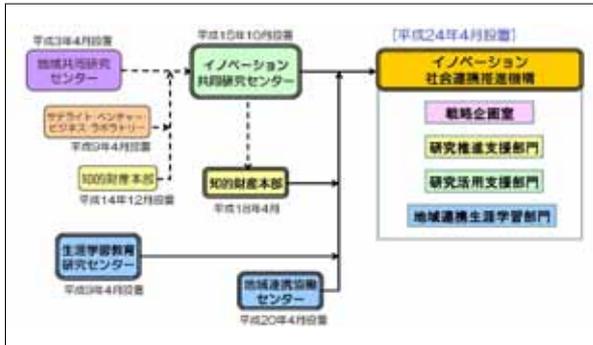
1. 「母親と子供の絆」を深めるためのダンスの創作活動に対する推進サポート事業	19
〈代表者〉赤田 信一 教育学部 准教授	
2. 幼児指導絵本『あそび』と静岡の絵本文化	21
〈代表者〉今野 喜和人 人文社会科学部 教授 ・ 平野 雅彦 人文社会科学部 客員教授	
3. 中小企業の情報化推進と社会人基礎力を育む IT 経営実践道場	24
〈代表者〉田中 宏和 情報学部 教授	
4. 世界の遊びとスポーツでつながる！異文化交流プロジェクト	26
〈代表者〉矢崎 満夫 教職大学院 准教授	
5. ものづくりを通しての「環境啓発」プロジェクト	28
〈代表者〉井上 直巳 技術部 技術専門職員	
6. 遊びや体験活動を通して遊びに熱中する子ども育成の場「ちびっこ寺子屋」プロジェクト	31
〈代表者〉松永 泰弘 教育学部 教授	
7. 自主防災活動に男女共同参画・多様性配慮の視点を導入するための研修者養成サポート事業	33
〈代表者〉池田 恵子 教育学部 教授	
8. 静岡市版「まちのお仕事図鑑」を活かした学校向けキャリア教育プログラムの開発と普及	35
〈代表者〉塩田 真吾 教育学部 講師	
9. 平成 24 年度ぬまづ環境塾支援事業	37
〈代表者〉水谷 洋一 人文社会科学部 准教授	
10. 静岡市沼上資源循環センター啓発施設を利用した自然環境を学びながら親子運動教室	39
〈代表者〉杉山 康司 教育学部 教授	

巻 頭 言

静岡大学「地域連携応援プロジェクト成果報告書」の発行にあたり

阿部 耕也 | イノベーション社会連携推進機構 地域連携生涯学習部門長

静岡大学は、『自由啓発・未来創成』のビジョンを掲げ、「質の高い教育と創造的な研究を推進し、社会と連携し、ともに歩む存在感のある大学」を目指して、教育・研究・社会連携の三つを大きな使命としています。なかでも社会連携に関しては、「地域社会とともに歩み、社会が直面する諸問題に真剣に取り組み、文化と科学の発信基地として、社会に貢献する」ことを使命としており、平成24年度は地域連携と産学連携に携わる組織を統合し、イノベーション社会連携推進機構を設置したところです。



静岡大学の社会連携組織図

学内において、地域連携活動の窓口となる組織を設置する前から、すでに本学の学生・教職員はさまざまな地域連携活動に携わっていますが、それらの活動は必ずしも学内外の皆様には知られておらず、また活動に際していろいろな困難を抱えているのが実情です。そこで、イノベーション社会連携推進機構・地域連携生涯学習部門の前身である地域連携協働センターは、「地域連携応援プロジェクト」を企画し、「本学の学生・教職員が主体となり、地域の人々や団体、自治体等と協働で取り組んでいる又は新たに取り組もうとする地域活性化につながる活動」への支援を学内で公募したところ、初年度17件、2年目18件の応募がありました。

書類審査及びヒアリング等を経た上、内容的に関連のある防災総合センターや学生支援センターの協力も得ながら、初年度11件（うち、本機構採択分7件）、次年度14件を採択し、支援することができました。センター経費からの予算支援は2年で総額250万円でしたが、防災総合センター、学生支援センターからも同等の支援が得られ、地域連携活動へのサポートを広

げることができました。なお、支援採択に至らなかった応募テーマにも素晴らしい内容が多く、全てを採択したいとの審査員のコメントもありましたが、経費の面で叶いませんでした。

初年度において支援が決定した各プロジェクトチームは、学外の方々と連携しながら着実な活動を展開し、有益な成果が得られ、発表会を催すとともに成果報告書をセンターWebサイトに掲載しました。その成果が学内外に高い評価を得られたこともあり、2年間にわたる成果報告を今度は冊子のかたちで上梓したいと考え、ここにそれらの成果をまとめて「地域連携応援プロジェクト成果報告書」として発行いたします。

本成果報告書をご覧ください、本学には学生・教職員の携わる多様な地域連携活動があることを知っていただき、今後それらの活動に加わったり、あるいは新たな地域連携活動を始めたりするきっかけとしていただければ有り難く存じます。



平成23年度プロジェクト募集のポスター

Let's 能プロジェクト

－（財）静岡県文化財団「平成23年度芸能普及プログラム」との連携－

小西 潤子 | 教育学部 教授

能は、小・中学校の教材としてもとりあげられている日本伝統芸能の1つであり、静岡県にもゆかりがある。しかし、一般には敷居が高く、観客の多くは中高年が占めている。こうしたことから、（財）静岡県文化財団（以下、財団と表記）は、これまでも若い世代への能楽普及のための自主事業やアウトリーチ活動を推進してきた。一方、教育学部は10年以上にわたって担当教員・小西を通じて、文化芸術事業実習としてこれらの活動に学生を参加させるなど、財団と連携・協力してきた。本プロジェクトは、財団主催の「平成23年度伝統芸能普及プログラム」の一環として、財団から提案された。能楽普及のためのアウトリーチ活動を実習経験のある学生が主体となってアイデアを出して企画運営をするというものであった。能楽師は、能の普及活動を積極的に推進している。財団としては、能楽師との媒介役として交渉等を引き受けることで、将来的には大学や地域住民主体の事業へと転換するための足がかりとしたい。一方、大学側にとっては音楽科教員養成の専門教育において、学生たちが日本伝統音楽を間近で学ぶ貴重な機会となる。プロジェクトに加わる学生にとっては、企画運営のプロフェッショナルである財団から直接ノウハウを学ぶ機会になる。しかも、大学外でのアウトリーチ活動を行うことによって教員としてのスキルアップの機会となる。参加者すべてにメリットがもたらされると期待されたのである。

2011年5月13日に第1回の会合を行い、プロジェクト・メンバーとして実習経験のある音楽文化専攻4年山崎綾、横関美咲が参加することになった。メンバー自身もなじみがない能のアウトリーチ活動を行うことから、ともに主体的に学ぶことを意識して、プロジェクトの名称を「Let's 能」とした。以後、適宜財団スタッフにも加わってもらいながら、夏休みまで週1、2回以上のペースで会合をして企画を固めていった。主な企画としては、高校と大学で能楽師を招いての実演付講演からなるイベントを行い、そこでの配布資料として小冊子を作成することにした。小冊子作成にあたり、写真やデザインを得意とする音楽文化専攻4年の小嶋遼がメンバーに加わった。そのほか財団主催の関連公演の広報をすることになった。

大学以外でのイベント実施先を高校としたのも、メンバーの提案による。理由は、自分たち大学生と近い年代であること、小中学校に比べて高校では能楽普及イベントの機会がないことによる。加えて、高校と大学にとっては高大連携事業となる。高校は生徒の大学進学意欲を高める効果を期待し、大学は地域での広報活動と位置付けられる。実施先を決定するにあたっては、東京から招聘する能楽師の当日の移動の便や音楽専任教員が配置されているかどうかなどの条件を考慮し、静岡県立静岡城北高校とした。夏休み後には音楽担当の渡辺裕教諭と打ち合わせを重ねて、高校側の現状とニーズを把握することに努めた。また、双方の行事や時間割を考慮して日時を決定し、能の実演と収容生徒数に適した会場として体育館を設定した。対象は、1年生288人となった。

多くの能の演目は、「あの世」からのメッセージである。主人公は、この世で遂げられなかった想いを告げるために化身として現れるが、思いあまって修羅場で本性を現す。最後には鎮魂され、静かにあの世に戻っていくというのが典型的なストーリーである。長引く不況や少子高齢化の問題に直面する中で、大人たちの望みに応えて、若者は小さな世界で安定した生活を求める傾向にある。しかしながら、現実に対応するためには柔軟に変化することが求められる。理想と現実のギャップに悩む高校生や大学生に対して、人はさまざまな状況の中で変わることが当たり前であることを伝えることが、本企画の重要なメッセージとなると考えた。演目は、変身をわかりやすく示せることやイベントの季節にあったものであることを考慮して、「紅葉狩」からシーンを取り出すことにした。これは、この世の者とは思えない美しい高貴な女性たちに化けた鬼神が平維茂をだまして酒に酔わせるが、夢に現れた神に救われるというストーリーである。

能楽師は、主人公を演じるシテ方と能の音楽を担当する囃子方の中から笛方を選んで招聘することにした。高校では、舞台芸能としての能全体のイメージを伝えるために、シテ方からの話を中心にし、音楽を専攻する学生を対象とした大学での講演では、主に笛方から、楽譜にあたる「唱歌（しょうが）」や演奏方法

について聞くことにした。能楽師の家に生まれ、若手として活躍する観世流シテ方・角幸二郎氏と、大学の教員養成課程で作曲を学び、一般人女性として能楽師になった一噌流笛方・八反田智子氏に講師を依頼した。角氏、八反田氏には、それぞれ事前に時間をとってもらい、メンバーが東京の観世能楽堂等で取材をした。担い手である能楽師への直接の聞き取り調査は、単なるイベント内容の打ち合わせにとどまらなかった。どのような心意気で舞台に臨み、どのようなプロセスを経て演目が観客の前に現れるのかといった能楽師の側からの能の一側面を知ることができ、彼らと高校生・大学生の間に立ってどのように橋渡しをするかを考えるための重要な機会となった。それ以上に、初めて訪れた能舞台は、メンバーにとって衝撃的であった。上演が繰り返されてきたその場所には、「魂」が宿っているように感じられた。夢中になって小嶋が写真を撮った。

それからは、小冊子作りに力を入れていった。能の美学を伝えるために、すみずみまで考えてデザインしていった。表面的な美しさではなく、使い込まれた生々しさを美しく伝えたいと思った。表紙は能舞台とし、舞台裏から見た能舞台、能楽師のすり足、衣装の柄、扇、面、楽器とそれぞれ見開きで1つのテーマを取り上げた(写真1)。能の美学を感じ取ってもらうために、文字による解説の代わりに世阿弥の『風姿花伝』のことばを編集した一節を載せるのみにした。想像力をかきたてることを意図してあえて白黒印刷とし、CD解説書サイズ、やや厚めの和柄風の紙を選んだ。高校生、大学生が手にとった瞬間に何かが伝わるようにしたかった。偶然のきっかけで、題字や花のイラストを書文化専攻の学生に依頼することができた。また、財団よりデザイナーの榎原幸弘氏を紹介してもらい、アドバイスしていただくことができた。



小冊子で取り上げたテーマの例



八反田氏の静岡城北高校での能管実演

イベント当日の運営は、予想以上に準備が必要であった。それぞれの役割と分担を考慮しながら、能楽師、財団スタッフ、プロジェクト・メンバーが静岡城北高校と静岡大学を移動する手配だけでも、細かい計画を立てる必要があった。2か所の会場設定も、メンバーだけでは不可能であり、大学待機の応援スタッフに準備を依頼した。直前まで、司会進行の原稿を書いたり、出来上がった配布資料、財団の関連イベントチラシやアンケートをセットにしたりする作業などに追われることになった。

正直なところ、高校生がどのような反応をするのかは不安であった。通常の鑑賞教室のように挨拶から始めるのではなく、生徒たちが体育館に着席して落ち着いたところで、突然笛が鳴り響くことから始めることにこだわった。西洋音楽のように、始まりと終わりが区切られていない能の世界そのものを見せたいと考えたからである。結局、マイクは準備できなかったのだが、体育館の床と天井を伝わる音と振動は相当のものであった。ぴんと張り詰めた空気の中で、たった二人の能楽師の生の音が、生徒たちの身体に直接響いたのであった。

教員になることよりも日本音楽の担い手となることを選んだ八反田氏の大学での講演も、参加した学生に刺激を与えた。生の音に圧倒されたことで、自らが子どもたちに教える立場になるのに、あまりにも本物を知らないことを自覚する機会となった。彼らの体験が受け身にとどまらざるを得なかったのに対して、プロジェクト・メンバーは言葉では言い尽くせないほどのものを得たはずである。それが具体的にどのようなものであるのか、まだ本人たちにはわからないかも知れない。しかし、彼らが次の世代を養成するときに、大きな力となると信じている。

清水エスパルスと静岡大学との「三方よし」交流協定に関する提案事業

水谷 洋一 | 人文社会科学部 教授
人文社会科学部経済学科環境政策ゼミナール 3 年生

清水エスパルスと静岡大学とは、これまで様々な形でつながりを持ってきました。しかし、それはすべて個々の教職員とエスパルスのスタッフとの個人的な関係の中でのつながりであり、清水エスパルスと静岡大学との組織的な関係をベースにしたものではありませんでした。一方、全国の大学の中には、すでにJリーグのクラブと連携協定を結び、様々な連携活動を展開している例が多くあります。

私たち環境政策ゼミナールは、これまでの清水エスパルスと静岡大学とのつながりを、組織と組織との公式的な関係に発展させるとともに、それを、大学にも、エスパルスにも、そして地域社会にもよい効果をもたらすものとして構想できると考え、今年度、「静岡大学と清水エスパルスとの包括連携協定の案を作成し、静岡大学学長と（株）エスパルス社長に提案する」プロジェクトに取り組んできました。

私たちが提案する連携協定は、「大学よし」「エスパルスよし」「地域社会よし」の「三方よし」を基本理念とし、(1) 静岡大学としては、教育活動の活性化や大学としての新たな魅力づくりを、(2) 清水エスパルスとしては、クラブ価値の向上や学生サポーターの拡大等を、そして、(3) 地域社会としては、静岡大学とエスパルスが協同で支援する新たな地域エコ活動やスポーツ振興活動の展開を、もたらすことを目的としています。

私たちのプロジェクトのこれまでの経緯は下記の通りです。

<プロジェクトの経緯>

- (1) 毎週1回のゼミ・ミーティング (2011年4月～)
- (2) エスパルス ホームタウン推進室・広報室とのディスカッション (6/15、11/8)
- (3) エスパルスホームゲームの視察 (6/15)
- (4) 協定先進4事例の訪問調査 (8月)
山梨学院大学－ヴァンフォーレ甲府
埼玉大学－浦和レッズ
産業能率大学－湘南ベルマーレ
茨城大学－鹿島アントラーズ
- (5) ゼミ合宿 (9/6、7)
- (6) SNSミクシィ上におけるエスパルス・サポーターとの意見交換 (10月～)
- (7) 地域連携協働センターとのディスカッション (11/8)
- (8) 経済学科学学生研究成果発表会での報告 (12/13)
- (9) 教育学部・松井恒二教授との意見交換 (1/6)
- (10) 地域連携協働センター成果報告会での報告(1/26)
- (11) 包括連携協定案および付属資料のとりまとめと、静岡大学学長、エスパルス社長への提出 (2月)

静岡大学地域連携協働センターからいただいた助成金は8月に実施した協定先進4事例の訪問調査の旅費に使わせていただきましたが、この調査は私たちにとってとても実り多いものでした。各大学とJリーグクラブとの協定締結までの経緯、協定の内容とその実施状況、連携によるメリット、問題点と課題などを、詳細



「三方よし」のイメージ



ヴァンフォーレ甲府への訪問調査 (8/15)

かつリアルに把握することができました。

その後、私たちは、これら先進事例の優れている点はさらに発展させ、問題点については改善策を考えていくため、エスパルスホームタウン推進室・広報室の方々、エスパルスのサポーター、地域連携協働センターの先生方や教育学部の松井恒二教授と意見交換をさせていただきました。

このような経緯の中で、私たちは、静岡大学と清水エスパルスとの包括連携協定によって実施すべき4つのプロジェクトをまとめましたので、以下に紹介させていただきます。

<私たちが提案する4つのプロジェクト>

1 教育研究プロジェクト

最初のプロジェクトは、「教育研究プロジェクト」です。このプロジェクトには、2つの柱があります。まず一つは、エスパルスの社長、監督、選手などを静大に講師として来ていただいて共同講義を行うことです。もう一つは、大学の教員や組織が調査・研究面でエスパルスの戦略的事業展開に貢献することです。これらによって、大学としては、教育活動の活性化と研究面での地域貢献を実現でき、エスパルスとしては、クラブ価値の向上と、経営戦略の強化を図ることができると考えます。

まず共同講義ですが、タイトルとしては「スポーツマネジメント概論」などが考えられます。プロのスポーツチームやその運営会社を持続的に経営していくための方法・手法などを学びます。この講義は市民開放講座として、一般市民の方々も聴講できるようにします。ゴトビ監督や小野・高原選手が講師になってくだされば、学生や市民で講義室は満杯になり、静大の目玉講義になると思います。

次に、静大からの調査・研究面での協力ですが、例えば、スタジアムにおける来場者調査や静大生とエスパルスによるグッズの共同開発、エスパルス主催試合の運営費等の分析、エスパルスによる地域経済波及効果の分析などが考えられますが、これらのものは、エスパルス側から強いニーズがあることが、ヒアリングによって分かっています。静大に数多くある研究室やゼミから、エスパルスとのコラボで実施する調査や研究を募集し、その実施経費を大学の地域連携協働センターが支援していただければ、多種多様でユニークな調査研究協力ができるのではないかと考えます。

2 サッカー人財育成プロジェクト

このプロジェクトの目的は、2つあります。まず、

エスパルス選手のセカンドキャリアを静大が応援し、そのことによってプロチームとしてのエスパルスの魅力を増大させようという目的です。次に、地元サッカー人財の育成のために、静大のサッカー部を強化し、それを大学の知名度アップにもつなげようという目的です。

まず、エスパルス選手のセカンドキャリアの応援ですが、サッカー選手としての寿命は平均3年から5年と言われています。したがって、選手の引退後のキャリアをどう形成していくかは、クラブの大きな課題となっています。そこで、静大教育学部の体育コースをはじめ、各学部のAO・推薦・社会人入試に「エスパルス特別推薦枠」をつくり、静大で引退後のキャリア形成をスタートしてもらおうというわけです。

次に、静大サッカー部の強化ですが、その必要性は2つあります。まず一つは、エスパルス・ユースの選手でも、すぐにトップにあがれる者は少なく、多くは、大学や企業のサッカー部で、さらなるスキルアップが必要だということです。もう一つは、高いレベルでサッカーを続けたいけれど、勉強もしっかりとしたいし、経済的理由からサッカー部の強い大都市圏の私立大学にはいけない、という高校選手が少なからずいるということです。こういう人材を積極的に受け入れ、地元で育成するために、静大が「サッカー部の強い国立大学」になることが求められていると思います。

3 トコトン「あいあい傘」プロジェクト

このプロジェクトは、Jリーグの名門チームであるエスパルスとトコトン付き合うことによって何よりも私たち静大生にとっての「大学の魅力」を高めようというのが目的です。このプロジェクトのコンテンツとして、私たちは4つ考えたのですが、紙面の関係上、ここではそのうちの2つをご紹介します。

まず1つは、「静大生とエスパルスとのステップ・アップな出会い」です。私たちが8月に実施した先進4事例の訪問調査では、「学生とクラブとの関係がいつも散発的で、継続的な流れができていない」という声を多く聞きました。そこで、散発的ではない静大生とエスパルスとの出会いの機会や、段階的にステップ・アップしていくような関係をつくらうというのが、私たちの提案です。ボランティア、アルバイト、インターン、そして就職と、静大生がエスパルスと出会い、寄り添っていけるチャンスが継続的にあれば、それは、私たち学生にとって「静大生であることの大きな魅力」になると思います。

次に、「静大Match Day」の開催です。静大がエスパルスのホームゲームのうち1試合のスポンサーになり、学生と教職員で実行委員会をつくって、ゲームの前やスタジアム周辺での企画を立案・運営します。具体的には、学生やOBによるキックターゲットやミニゲーム、大学ブースの出展、エコボランティア、環境豆知識の掲示などを行い、エスパルスのホームゲームを観るだけでなく、参加し、トコトン楽しめます。

4 地域出動プロジェクト

最後のプロジェクトは、「地域出動プロジェクト」です。これは、エスパルスの社会的影響力と静岡大学の教育研究資源を活用して、静大の施設・設備を使ったスポーツ教室や、エスパルスを中心とした地域クリーンアップ作戦を行うというものです。これらによって、静大もエスパルスも地域貢献の大きなチャンネルを持ち、大学の価値、クラブの価値を向上させることができると考えます。

まずは、「静大×エスパルススポーツ教室」ですが、これは、静大の施設・設備を会場にして、親子向けのスポーツ教室を開催するというもので、サッカーだけではなく、様々な競技を実施し、終了後、エスパルス選手やパルちゃん、オレンジ・ウェブによるサイン会や握手会を実施するというのが特徴です。スポーツ施設・設備も静大の大きな資源ですので、これを活用し、エスパルスの力も借りて、地域における静大の価値を高めたいと思います。

次に「エスパルス×静大ホームタウンClean-Up大作戦」です。これは、「エスパルス・エコチャレンジ」の地域展開として、エスパルス、静大、周辺大学、市民、企業、みんなが協働し、ホームタウン＝静岡市の美化に取り組もうというものです。こういう活動をするためには、何よりも人集めが最大の課題ですが、そこをエスパルスの魅力で突破していければ、と考えています。また、活動メンバーにはIDナンバー付きのオレンジリストバンドを配布し、参加した回数によってメンバーの格付けが上がったり、エスパルスからプレゼントがもらえたりといった工夫も大切かと思っています。

<私たちが提案する4つのプロジェクト>

1 教育研究プロジェクト

- 1-1 エスパルスの首脳や選手が静大で講義をします!
- 1-2 静大の「頭脳」がエスパルスをサポートします!

2 サッカー人財育成プロジェクト

- 2-1 エスパルス選手のセカンドキャリアを応援する!



経済学科学学生研究成果発表会での報告 (12/13)

2-2 サッカー部の強い国立大学になる!

3 トコトン「あいあい傘」プロジェクト

3-1 静大生とエスパルスとのステップ・アップな出会いをつくる!

3-2 静大Match Dayの開催!

4 地域出動プロジェクト

4-1 静大×エスパルススポーツ教室

4-2 エスパルス×静大ホームタウンClean-Up大作戦

私たちが提案する上記の4つのプロジェクトの説明文書と包括連携協定の文案、そして、協定先進4事例調査報告書は、すでに静岡大学と清水エスパルスの幹部の方々に届いています。今後卒業までの1年間、これらのプロジェクトの実現のための取り組みを進めていきたいと考えています。

サッカーを活かしたまちづくりを推進する「エスパルスドリーム教室」

塩田 真吾 | 教育学部 講師

清水エスパルスのホームタウンである静岡市は、日本一のサッカーフレンドシティーを目指し、市民参画による「サッカーを活かしたまちづくり」を推進しています。「ゆりかごから息続くまで」をモットーに、多くの人々がサッカーを楽しみ、そして「サッカーのまち静岡」に愛着を持てるように、老若男女の各カテゴリー別全国大会の開催やタウンミーティングを開催しています。しかし、このまちづくりでは、大人だけでなく、次世代を担う子どもたちをどのように巻き込むかが課題となっています。

一方、第一生命保険が行う「大人になったらなりたい職業」において、2010年の男子の第1位は「サッカー選手」でした。調査が始まった1996年以降、サッカー選手は常に上位にランクインしており、その人気の高さが伺えます。子どもたちにとって、サッカーは身近で人気のあるスポーツであるとともに、サッカー選手は憧れの職業でもあるのです。

そこで本事業「エスパルスドリーム教室」では、子どもたちに人気の高い「サッカー」や「サッカーに関する仕事」をテーマとした「学校の授業」を行うことで、子どもたちに「サッカーを活かしたまちづくり」に関わってほしいと考え、2011年度から事業をスタートさせました。

今回は、この「エスパルスドリーム教室」の取り組みについて紹介したいと思います。

<サッカーと算数??>

「エスパルスドリーム教室」は、大きく「選手派遣型授業」と「スタッフ派遣型授業」の2つの授業を実施しています。

「サッカー選手」、「授業」と聞くと、「体育の授業」をイメージされるかもしれませんが、「選手派遣型授業」では、算数や理科、社会といった教科の学習でサッカーをテーマとした授業を行っています。

例えば、「サッカーで学ぶみはじ」という授業では、清水エスパルスの選手が講師として参加し、子どもたちと一緒に50mを走ります。

当然、選手が子どもたちに勝つのですが、ここからが算数の勉強です。

「いったい、何メートルのハンデがあれば、選手と同時にゴールできるのだろうか?」

子どもたちは、「みはじ」(道のり/速さ/時間)を使って、選手のタイムと自分たちのタイムから、必要なハンデを計算します。

そして、計算したハンデをもとに、もう一度、選手と一緒に50mを走ると、今度は見事同時にゴールできるのです。

授業のまとめでは、選手へのインタビューやサッカーを活かしたまちづくりを推進するための清水エスパルスの取り組みなどを紹介します。子どもたちからは、授業時間の45分では足りないほど、たくさんの質問が出されます。

こうした算数の授業以外にも、選手のシュートをスーパースローカメラで撮影し、関節や筋肉の動きについて学ぶ「サッカーで学ぶ体のつくりとはたらき」



選手と一緒にハンデを計算する子どもたち (上)
計算したハンデをもとに選手と一緒に走る子どもたち (下)

(理科) やサッカーのまち「静岡」の特色について、他のサッカーチームのホームタウンと比較しながら学ぶ「サッカーチームから学ぶ地域の特色」(社会) などを行っています。

こうした授業を通して、算数、理科、社会への興味とともに、清水エスパルス、そしてサッカーを活かしたまちづくりにも興味を持ってもらえたらと考えています。

<サッカーに関わる仕事??>

他方、サッカーを活かしたまちづくりを推進する上で、忘れてはならないのが、「チームスタッフ」の存在です。

子どもたちにとって、「サッカーに関わる仕事」とは、選手、コーチ、審判などしかイメージできないかもしれませんが、サッカーチームを支えているのが、営業、広報、ホームタウン推進などのスタッフなのです。「スタッフ派遣型授業」では、そんなチームスタッフに着目し、スタッフの仕事を紹介するキャリア教育授業を実施しています。

例えば、営業企画をテーマにした授業では、清水エスパルスの営業企画のスタッフが講師として参加し、クイズを交えて仕事内容について紹介するとともに、子どもたちに「小学生に人気でそうなエスパルスグッズの開発」を依頼します。

子どもたちは、苦勞しながらも「ミサंगा」や「お守り」、「キーホルダー」、「文房具」などのアイデアを考え出します。講師は、それらのアイデアひとつひとつにコメントを行い、仕事のやりがいや苦勞、そしてサッカーを活かしたまちづくりの大切さについて語ります。

また、ホームタウン推進のスタッフが講師となった授業では、子どもたちに「スタジアムに来てもらうた



ホームタウン推進の仕事を紹介するエスパルスのスタッフ

めのイベント」を考えてもらい、スタジアムに来てもらうためには、様々な工夫や苦勞があることを実感を持って学んでもらいます。

これまで、子どもたちは、サッカー選手の話聞く機会はあっても、裏方であるスタッフの話聞く機会はなかなかありませんでした。しかし、スタッフとしてサッカーに関わり、チームを支え、サッカーのまちづくりを推進している様子を子どもたちが知るとは、職業観を広げるというキャリア教育としても意義のあることなのではないかと考えています。

<サッカーを活かしたまちづくりの推進に向けて>

今年度、エスパルスドリーム教室は、静岡市内の小中学校17校、1,000人以上の児童生徒を対象に実施することができました。

「サッカーを活かしたまちづくりに子どもたちをどう巻き込んでいくか」という地域の課題に対して、企業、行政と連携し、教育学部の立場から「授業」という切り口で関わったことは、大きな成果であると言えるのではないのでしょうか。

エスパルスドリーム教室の実施者として、そして清水エスパルスのひとりのファンとして、この事業を通して次世代の静岡をつくる子どもたちが育っていくことを願っています。



授業で使った資料の一部(営業企画の仕事)

「多文化共生」をテーマとした絵本読み聞かせプロジェクト

矢崎 満夫 | 教職大学院 准教授

1 はじめに

静岡市においても、ここ数年、外国人居住者の数は増加しています。市の統計によると、2011年4月現在、静岡市の外国人登録者総数は80カ国・8,389人でした。2006年調査時の約6,000人と比べると、この5年間で約2,400人も増えていることがわかります。

それに伴い、外国人家庭や国際結婚家庭等の日本語指導が必要な子どもたちが静岡市立小中学校に就学するケースも増加し、2010年5月の調査では、約190人の当該児童生徒が在籍していることが確認されています。日本語や日本文化のわからない子どもたちを学校や地域に迎えて、学校の教職員や日本人の子どもたち・保護者は戸惑い、摩擦や衝突が生まれることも決して少なくありません。

多くの外国人を迎え入れる可能性が高い将来に向けて、日本の子どもたち・保護者・学校・地域に対し、いかに「多文化共生」の土壌づくりを目指した活動を進めていくかは、今後の重要な地域教育課題となるものと思われまます。そこで本プロジェクトでは、「多文化共生」をテーマとした絵本の作成およびその読み聞かせ活動を行うことによって、学校・家庭・地域における外国人と日本人との「つながり」を創出することを目的としました。

2 本プロジェクトチームの構成

私たちのプロジェクトチームは、年少者日本語教育および多文化共生教育を専門とする矢崎（教職大学院教員）を代表に、学部生の長谷川諭美（教育学部4年生）と芝清美（教育学部3年生）の3名で構成しました（学年は2012年3月現在）。長谷川と芝の2人は、静岡市立小中学校で外国人等の子どもたちに対する支援ボランティアをしてきましたし、絵本づくりに対する意欲が高かったため、本プロジェクトの中心メンバーとして活動することになりました。

3 NPO法人ONESとの連携

NPO法人ONESは、静岡大学の学生を中心とした、日本語指導が必要な子どもたちを支援しているボランティア団体です。

当該団体は静岡市教育委員会と連携しており、支援ボランティアの学生は日本語指導が必要な子どもたちが在籍する市立小中学校へ赴いて、日本語や教科学習の支援を展開しています。また、日本語指導が必要な子どもたちと日本人の子どもたちや教員との間の「仲介役」としての役割を担い、クラスの中の仲間づくりや橋渡し等の支援も行っています。

このNPO法人ONESとともに本プロジェクトを遂行すれば、市立小学校等の教育現場でもオリジナル絵本の読み聞かせ活動が実施できると考え、協働して進めていくことにしました。

静岡大サークル「ワズ」 多文化共生へ 絵本手作り

外国人児童の語学支援活動などを行っている静岡大ボランティアサークル「ONES (ワズ)」が子供たちに多文化共生についての理解を深めてもらうと、オリジナル絵本「カラフル」を作製した。学生らが「日本人も、外国人も、他の国や文化について多々さっかけにしてほしい」との思いを込めた一冊。静岡市駿河区の市立南部図書館5日、お披露目会を開き、「今後も小学校で読み聞かせを行った」と意気込んだ。

静岡でお披露目会

約20人の学生が所属する「ワズ」は、静岡市内の小中学校で活動を行っている。その中で外国人児童がより、共生をテーマにした絵本作製を思い立った。ストーリーは「日本の子供たちの理解から絵まで全てを自分たちで完成させた。絵本は赤色の花が好きで、妖精だけが友達というライオンが主人公、ライオンがまいた種から、さまざまな色の花が咲いたことをきっかけに、ライオンに友達が増えた」というストーリーに仕上げた。花や園や文化にたとえ、他の国を知ることで世界は広がるなどのメッセージを込めた。お披露目会では学生2人が、集まった親子約20人を前に感情を込めた読み聞かせを行った。絵本に込めた「思い」を「身近に外国人児童がいる」とは国際理解を進める絶好の機会になる」と説明し、多文化共生の推進を呼び掛けた。

オリジナル絵本「カラフル」を贈呈する静岡大ボランティアサークル「ワズ」の学生

静岡市駿河区の市立南部図書館

静岡新聞2011年11月6日朝刊記事

4 絵本づくりのプロセスと絵本の内容

「多文化共生」をテーマとしたオリジナル絵本をつくるのに先立ち、静岡市在住の児童文学作家・草谷桂子先生に絵本づくりの基礎に関するご指導をいただきました。そして長谷川、芝の2人は、NPO法人ONESのメンバーと数多くの議論を重ね、協働してストーリーやキャラクターの原案をつくり、下書きや色塗り、飾り付け、製本等の作業を進めていきました。

完成したオリジナル絵本には、「カラフル」という名前をつけました。そのあらすじは、「友だちのいないライオンが、ある日、春風の妖精がくれた花の種をまいたところ、いつもの赤い花だけではなく、今回は色とりどりの花が咲いた。ライオンは、花を見に集まってきた他の動物たちに勇気を振り絞って声をかけ、その花の種をみんなと一緒にまいた。すると次の春、良い香りの美しい花が咲き乱れ、ライオンはみんなと仲良しになることができた」というものです。

様々な色の花が集まった美しさを多様な文化が存在することの価値に重ね合わせ、絵本のストーリーの中に「多文化共生の意義について考えるきっかけになれば」というメンバーの想いを込めました。



5 読み聞かせ会の実施

NPO法人ONESと協働した絵本の読み聞かせ会は、2回実施することに成功しました。

第1回は、2011年11月5日に静岡市立南部図書館で、親子連れを中心とした約20人の参加者に対し、(1) 歌遊びによる交流 (2) 絵本『カラフル』読み聞かせ (3) 絵本の内容に関するクイズタイム (4) 絵本に込めた想いの解説 (5) NPO法人ONESの紹介という内容で行いました。当日参加したある母親からは「このような読み聞かせの機会は今までなかったのでも感動しました。とても素晴らしい活動なのでこれからも頑張ってください」という嬉しい感想をいただきました。

第2回は、2011年12月22日にONESメンバーの支援先である静岡市立三保第二小学校において実施しました。当日は、ブラジル人児童1名を含む児童数計7名のクラスにおいて、5名の教職員の参観のもと、第1回とほぼ同様の内容で読み聞かせ会を行いました。会の後、児童たちからは「折り紙やフェルトで作った花畑が立体感があってすごい」「読み聞かせが楽しかった」「キャラクターがかわいかった」という声が聞かれました。また、教職員からは「児童にとってこのような学生との交流は良い刺激となるので、またぜひ機会をつくってほしい」という意見をいただきました。



読み聞かせ会の様子

6 今後の活動予定

本プロジェクトの成果をもとに、今後もNPO法人ONESと連携し、学校現場における絵本読み聞かせ会を実施していく予定です。また、作成したオリジナル絵本『カラフル』は、いろいろな学校や地域の人々に読んでいただけるよう増刷し、希望するところにお配りすることとしています。そして来年度以降も、新しい絵本づくりにぜひ挑戦していきたいと思っています。

「ガイドマップ」で地場産業の魅力を再発見 —静岡市における産業遺産の振興を目的としたガイドマップ作成事業—

日詰 和幸 | 人文社会科学部 教授

梶山 雄紀 | 人文社会科学部法学科 3年 静岡産業遺産プロジェクト学生代表



指物の職人さんから説明を受けています

静岡市葵区の番町地区やその周辺には、徳川三代による駿府城の修築、浅間大社や久能山東照宮の建立の際に全国各地から集められた優秀な職人たちが定住するようになったことから、その後も職人町として栄えることとなりました。こうした職人たちの技術は後世へと代々伝わり、漆器や蒔絵、下駄等の地場産業として発展していくこととなりました。さらに、指物をはじめとする木工業は、プラモデル技術のベースとなったといわれています。「静岡産業遺産プロジェクト」では、こうした伝統的な地場産業は次世代へ継承していくべき貴重な財産（＝産業遺産）であると考え、日詰一幸教授の指導のもと、NPO法人「助け合いネット静岡」の作業部会「静岡産業遺産を保存する会」とともに保存・振興活動に取り組んでいます。今回は、地域連携応援プロジェクトとして助成していただいた「ガイドマップ作成事業」を中心に、その活動内容について報告し、今後の活動計画を紹介します。

＜活動に至ったきっかけ＞

私達が静岡市の地場産業に関心を持つようになったのは、昨年1月でした。所属する行政学ゼミでの研究題材を「静岡市の地場産業」に設定した私達は、「静岡産業遺産を保存する会」の方々からお話を伺うことになりました。「保存する会」は、静岡市の伝統的な地場産業を振興させていくことを目的としており、また、大学生との意見交換がしたい、とのことでした。

意見交換会では、塗下駄や蒔絵、漆器などの素晴ら

しい作品を見せていただき、またこうした伝統的な地場産業の数々が、近代の静岡市の発展を支えてきたことを教えていただきました。その一方で、生活様式の変化による需要の低迷や後継者不足から職人さんの数が減少しているだけでなく、市民の方々も自分たちの地域の伝統産業に対する認識が薄れてきているという現状についても知りました。また、まち歩きに連れて行っていただいた際の、「かつてはここも、ここも、職人の作業場だったけどね・・・。」という言葉からは、地場産業の衰退が、職人町としてのアイデンティティの喪失という、まち全体の問題に直結していることを感じました。

その数日後には、実際に職人さんの作業場に案内していただきました。住宅街の中にあったのは、戦前に建てられた土壁の作業場でした。薄暗く照らす裸電球、ほのかに香る木のおい。どこか懐かしいようで、でも新鮮な感じもする、不思議な空間でした。職人さんから漆塗りの作業について説明をしていただき、その工程の多さに驚きました。別の作業場では、指物の職人さんがカンナ削りを実演して下さいました。ミリ単位で正確に削っていく様子は、まさに職人技。長年の技術の積み重ねによって風格あふれる作品の数々が生み出されるのだと納得しました。それと同時に、こうした地場産業の魅力をもっと多くの人たちに知ってもらえる方法はないだろうか、またそのためには地元学生の学生として何ができるだろうか、と考えるようになりました。

＜ガイドマップ作成事業＞

作業場を訪ねた経験から、作業場の雰囲気や職人さんの生きた技や作品が出来上がるまでの物語を実際に体験してもらうことで、市民の地場産業に対する認識の向上へとつながるのではないだろうか、またそのような環境を整えることで、市外の観光客へのPRにもなるだろうと考えました。そのためには、まずはどこにどのような作業場があり、いつなら見学ができるのか、ということを確認に示す必要があります。そこで、職人さんの作業場を訪ねることができるようなガイドマップを作成してみようという話になりました。

では、どのようなガイドマップを作ったら良いのか。「保存する会」や市の地域産業課の方々と何回も意見交換を重ねた結果、地場産業だけでなく「まち歩きマップ」としても十分に楽しめるものとする、城下町としての歴史を考えて町名の由来も入れてみる、等といった具体的な案を作成しました。

そして昨年6月から、同業者組合の代表の方へのあいさつ回りと、個別の職人さんへの取材を開始しました。職人さん達とつながりのなかった私達を「保存する会」の方々がサポートするという形で、基本的に1回目のあいさつ・顔合わせには同席していただき、2回目以降の取材活動は学生のみで行いました。職人さんからは、作品や作業工程についてだけでなく、自分の生い立ちや地域のこと、世間話まで、様々な話をして下さいました。ついつい興味深いお話に聞き入ってしまい、1時間以上も長居してしまうこともありました。また、何回も足を運ぶうちに、職人さんの趣味の部屋を見せていただくこともありました。そのようにして職人さんとの間に信頼関係を築いていき、12の職人さんと問屋さんから、ガイドマップへの掲載や一般の方の見学について承諾を得ることができました。

取材活動と並行して、各種の行事への参加や報道機関からの取材によって、活動の宣伝をしました。6月の「助け合いネット静岡」定期総会では、ガイドマップ作成事業の活動計画を報告し、会員の方々のご協力をお願いしました。10月には「番町市民活動センター」の2周年記念交流イベントへ参加し、活動内容について紹介したほか、同じように地域において活動している団体の方々と意見交換をしました。また今年2月には、静岡新聞社からの取材を受けました。

取材活動も終盤となった昨年末から、マップの図面やレイアウトの作成に取り掛かりました。まち歩きに活用してもらいたいという思いから、細い路地や公園



定期総会で、活動について報告しました

等を書き入れました。また、城下町としての歴史を表現するため地図はすべて手書きで、台紙にも和紙の柄を使用し古地図風に仕上げました。

3月初旬には助成対象分の1万部と連携団体分の5千部が納品され、各方面への配布活動を開始します。

<今後の活動計画>

私達は「マップを作成したら終わり」ではなく、そのマップが有効に活用されてこそ、この活動の意味があるのだと考えています。そこで、完成したマップを各施設に置かせてもらうだけでなく、積極的な活用をお願いしていくことも計画しました。例えば、市内の各小学校に配布し、社会科や総合学習で活用をしていただくことで、子どもたちに地場産業について少しでも関心を持ってもらえたらと考えています。また、ボランティアガイド団体の「駿府ウェイブ」に、観光客の案内の際にマップを活用していただく予定です。さらに、ガイドさん自身の地場産業に対する理解を深めていただくための勉強会も企画しています。

職人さんへの取材活動を通して、今まで気づかなかった問題点が明らかとなりました。その一つが、「問屋制度の衰退」がもたらす弊害です。ある職人さんは、週に何回も東京や大阪へ出かけ、作品を出展しています。こうした作品の販売やPR活動は従来であれば問屋さんの業務であり、流行や需要を考慮して職人さんに発注するというシステムをとっていました。しかし、近年の問屋業の衰退のため、職人さん自身がこうした業務を一手に請け負わなければならなくなりました。その結果、肝心な作品制作にかけられる時間が減少してしまっただけでなく、「買い手が本当に欲しいと思っているもの」が見えづらくなってしまったそうです。こうした買い手と売り手、両者のミスマッチングを解消するため、マップを活用した、職人さんと市民の方々によるワークショップの開催を検討しています。これ



駿河塗下駄の職人さん取材中、実演していただきました



完成したマップ。A3・両面刷りです。

により、双方向からのアプローチを強化するきっかけを作ることができると考えています。

今回作成したマップの改訂作業だけでなく、現在の掲載エリアにおける職人さんの情報の追加や掲載エリアの拡大も計画しています。行政学ゼミの後輩だけでなく、他学部の学生・市民の方々等、多方面にわたってこのプロジェクトの輪を大きくしていきたいと考えています。

Hamamatsu 合同大学祭プロジェクト

青木 徹 | 電子工学研究所 准教授

黒光 尊康 | 工学部機械工学科 4年 Hamamatsu 合同大学祭実行委員会学生代表



会場の様子

2011.3.11に東日本大震災が発生し、被災地の映像を見たときに衝撃を受け、被災地のために募金集めを行おうと思いました。しかし、既に多くの団体が募金集めを行っていたので、違う角度から支援を行うことを考えていました。東日本大震災の影響で浜松まつりの中止・自粛を知りました。これしかないと思いました。被災地を支援することができ、浜松をも盛り上げることが出来ること、それがHamamatsu合同大学祭です。

そこで、私達が掲げたサブタイトルが「Do what you can do～絆」です。これには、「自分に出来ることを考え、出来ることから始めよう」という想いが込められています。

以上の想いを達成するために以下の3つの目的を掲げ、取り組んでまいりました。

1 学生、企業、地域を繋ぐネットワークの構築

この目的では、学生同士の横の繋がりだけでなく、企業・地域との縦の繋がりを構築することで、地域活性化、学生の見識の幅の拡大を行うことを考えました。

2 枠を超えた発信・発見の場の提供

この目的では、若者の活動の限界という枠を自らで設定することなく、自分の可能性を極限まで追求していただくための発信を行い、発見の場を提供することによって若者の意識革新を行うことを考えました。

3 浜松に根ざし、日本が誇る大学祭の確立

この目的では、今後どれだけ規模が大きくなっても、この浜松という素晴らしい地を敬愛し続け、ここ浜松を中心に活動を続け、日本全国にHamamatsu合同大学祭を発信して日本周知のイベントにするという想いが込められています。

以上の目的を達成して、当初の想いを実現するために邁進してまいりましたので、以下の通りご報告いたします。

まず、本プロジェクト終了後にアンケート調査を実施することで、各目的の達成度を算出致しました。

I 学生、企業、地域を繋ぐネットワークの構築

達成率：50.65%

多数の企業や店舗の協力により開催前よりも繋がりができたが、お互いが価値を提供しあい、新たな付加価値を創造するネットワークの構築には至っていません。また、この大学祭自体が十分に認知されているとは言えず、目指すネットワークを構築するためには今回できた繋がりを活かして学生・企業・地域間でコミュニケーションをとっていく必要があります。

II 枠を超えた発信、発見の場の提供

達成率：64.4%

学生が大きなイベントを創るということ自体が枠を超えた発信といえるが、規模としてそれを発見する人が少なかったため、発信、発見の場の提供ができたとは言えません。一方で参加者からはこの企画を通して



来場者参加型アートライブペインティング

新たな発見があったという声を外部から頂くことがとても多く、一つの成果として受け取っています。来年以降は参加人数自体を増やし目的達成を心がけていく必要があると考えています。

Ⅲ 浜松に根ざし、日本に誇る大学祭の確立

達成率：37.9%

浜松に根ざしたと言えるほど浜松市内の方に認知してもらうことができませんでした。また日本に誇る大学祭としては企画のクオリティ、集客人数、認知度等が低く、他の大学で行われている大学祭に比べ劣っている部分が多かったです。この目的は、継続的に大学祭が開催され少しずつ大きな規模にしていく必要があるものなので、今後の開催のために今年の反省をもなく引き継いでいく必要があります。

次に、集客についてです。

集客につきましては、集客目標30,000人に対して、1日目4,000人、2日目21,000人、合計25,000人と、集客目標の30,000人に5,000人及ばない結果となりました。広報活動に不足があり、このような結果となったと考えられます。そこで、以下に広報実績をご報告して原因を考察致します。

広報実績（配布数/発行数）

- (1) ポスター設置：計700部/700部 浜松駅周辺店舗、有楽街周辺店舗、郊外ショッピングモール、市内高校全25校
- (2) フライヤー設置：計8,000部/8,000部 モール街周辺店舗、有楽街周辺店舗、郊外ショッピングモール
- (3) ビラ配り：計5,000部/5,000部 浜松駅周辺、浜松市内、大学構内
- (4) パンフレット：計30,000部/40,000部 事前設置・配布、当日配布
- (5) インターネット（11月28日確認）：ホームページ



ミニキャンパスウェディングドレス審査



復興支援の様子

298,301PV、ブログ25,967PV

- (6) テレビ：SBS静岡放送、浜松ケーブルテレビ、県外ケーブルテレビ（豊橋、東京品川、飯田）
- (7) ラジオ：K-mix、FM-Haro、FM-Hi、SBSラジオ
- (8) 新聞：中日新聞11月25日（金）夕刊、11月26日（日）朝刊、新聞折り込み11万部
- (9) その他：「浜松百選」掲載30,000部 街中にぎわいカレンダー掲載遠鉄バス全線、その他街中各所

以上の広報活動では、学生ではなく一般の方に焦点を当てた広報活動を行ってまいりました。その結果、当日会場に足を運んで下さった来場者様の大多数が一般の方であり、学生の来場者数が少数という結果になったことがわかります。

次に、社会貢献活動についてです。

本プロジェクトでは、NPO団体「遠州ありがとうの会」と提携して、本プロジェクトで募った募金を東日本大震災で被災された方たちに物資支援を行う資金として寄付させていただきました。また、本プロジェクトのスタッフと「遠州ありがとうの会」が協力して、12月10日、11日、12日と、東北復興のために実際に東北に足を運び、炊出し・物資支援を行わせていただきました。

この度は、私たちが取り組むHamamatsu合同大学祭に多大なご協力をいただいたことに心から感謝申し上げます。私たちは、3つの目的の達成のために日々議論を交わし、第一回Hamamatsu合同大学祭開催のために取り組んできました。浜松により良い環境を構築するための第一歩に代表としてこのプロジェクトに携わることができたこと、また、皆様のご協力を得られたことに、この場をお借りしてご挨拶とさせていただきます。誠にありがとうございました。

梅ヶ島大代における「ホームカミングデー」の実施

富田 涼都 | 農学部 助教

澤原 勇貴 | 農学部環境森林科学科 3年



梅ヶ島大代地区

私たち静岡大学と梅ヶ島大代（おおじろ）地区との地域連携は、5年前から行われている「農業環境演習」が始まりです。「農業環境演習」とは、中山間地域を農業環境教育及び社会教育の場とし、地域社会への貢献と学生教育の両立を目指そうとしている演習です。3年にわたるプログラムでは、学生は年間10日以上農村体験を3年間続けます。学生は3年間、地区での農村体験を通し、地区にある課題を探求し、その課題の解決策を考え、実施していきます。この3年間の活動を経て、学生は将来の日本の農業や農村環境に関する問題に取り組むための素養を身に付けていきます。

この「農業環境演習」では、学生が様々な課題を取り上げます。その中の大きな課題のひとつに、後継者問題があります。現在の日本の農業の現状として、農業就業人口の約62%（H22）が65歳以上と高齢化が進み、後継ぎが確保出来ているのは全体の約20%（H23）と、今後の日本の農業存続が危惧されます。これは大代地区も例外ではなく、後継ぎが確保出来ていない農家が少なくないようです。そこで、大代の後継者獲得のために企画した行事が「ホームカミングデー」です。

ここでいう「ホームカミングデー」とは、仕事や結婚などの様々な理由により他の地区へ移り住んだ人（他出者）を中心に、むらに縁のある方にむらへ帰ってきてもらい、お盆に一堂に会して行うむらのお祭りのことです。この「ホームカミングデー」では様々な人が集います。そうした人たちがお祭りを通して交流を深め、互いにむらの魅力を再確認し合い、むらが活

気づく事で、ふるさとに帰ってきやすい雰囲気を作り、将来的にはUターンにつなげていくことがこのお祭りの目的です。

この「ホームカミングデー」の実施には地区の方と学生の連携が必要です。「ホームカミングデー」のイベントや準備などの決め事は、実習で大代に訪問した際や月に1度地区で行われる集落の寄合（常会）に出席し、そこで意見を出し合い、相談しながら決めていきます。その中で、地区の方では実行することが難しい部分を学生が担当するように準備を進めていきました。

今年の「ホームカミングデー」のメインイベントは、地区の道路で行う全長234mの流しそうめんです。この流しそうめんには大量の竹が必要になりますが、大代周辺には竹林があまりないため、静岡大学構内の竹林の竹を使いました。「ホームカミングデー」の数日前に学生が竹を切り出し、地区の方が大代まで運びました。大代に運び込まれた竹は半分に割り、節を取ります。こうして加工した竹は、8月15日の「ホームカミングデー」当日に、学生と地区の方の手で組み立てられました。

ちなみに、節取りの作業が最も大変でした。2日間ひたすら小刀で硬い竹の節を取り続け、血豆ができてしまいました。農家の方がグラインダー（電動ヤスリ）を持ってきてくださらなかったら、きっと本番前にみんな力を使い切ってしまったことでしょう。

サブイベントとして、竹箸作りや、景品付きのゲー



竹の組み立ての様子



節取り作業の様子



大学祭のパネル展示

ムなど、「ホームカミングデー」に参加した方がいい思い出を作ってもらえるようなイベントを実施しました。

第2回目の開催となる今年の「ホームカミングデー」には、学生も含めて約160人が参加し、昨年の参加者を大きく上回りました。参加者の中には知人から話を聞いて遠方から来てくださった方もいました。また、昨年取材してくださったSBSだけでなく、今年は静岡新聞も取材に来てくださるなど、活動の輪が広がっています。

さらに「ホームカミングデー」の活動内容を広く知ってもらうために、「ホームカミングデー」の様子や成果をパネルにして静岡大学の大学祭で展示しました。3月18日には梅ヶ島のお祭り（梅祭り）でパネル展示を行う予定です。

大学生と大代在住の方を除いた参加者の方にアンケートを実施したところ、多くの方が大代の魅力を発見できた、参加者同士で親睦を深めることが出来た、大代が活気づいたと回答していただきました。また、長く続けて欲しい、来年も参加したいという声も聞くことができました。大代の方からは、他出者が帰ってきてやすい雰囲気が出来上がってきたように思えるな

ど、着実に「ホームカミングデー」の効果が現れてきている事を示す言葉を聞きました。

「ホームカミングデー」は継続して開催することで効果が現れます。継続させて運営するために、流しそうめんを使った大量の竹の処理と、運営費を得ることが必要になります。そこで、竹を炭にして販売する予定です。そのための炭焼窯を大代の若い世代の方が中心になって作りました。また、この「ホームカミングデー」の思い出を残すために、アルバムを学生が作り、大代在住の方に配布しました。1家庭に1冊配布しましたが、大代の外で暮らす家族の分も欲しいと、数名の方から要望がありました。地区の方も、他出者の方にこの「ホームカミングデー」を憶えていて欲しい、大代の事を憶えていて欲しい、大代の将来を考えて欲しいという風に考えているのだと思います。

「ホームカミングデー」は、大代の農業の担い手を確保することが目標ですが、現段階では、昨年よりも「ホームカミングデー」の活動の輪が広がり、他出者の方が、むらに帰ってきてやすい雰囲気が出来つつあり、他の地区で暮らす外部の方が大代に来て、大代を知る機会が出来たというところです。今後は他出者を中心に、「ホームカミングデー」というお祭りを後継者の確保に繋げていくために、地区の方と連携しながら活動していきたいと思っています。



流しそうめん

「母親と親子の絆」を深めるための ダンスの創作活動に対する推進サポート事業

赤田 信一 | 教育学部 准教授

1 はじめに

地域や職場における様々な社会的活躍の多忙さの中にあっても、子育て世代の母親の多くは、その大切な家庭において、子どもを育て、何より母親としての愛情を子どもに注ぎながら生活されています。

その子育て世代のお母さん方において、子どもとの豊かな関わりを構築するひとつの手立てとして注目されている活動が、「母親と子どもの絆」を深めるためのダンスの創作活動（集団的なダンス）です。

静岡市内でも、ダンスを通して、子育てを楽しみ、子育てをより充実させようとする母親の方々が参加されている団体が複数存在しています。その中にあって、中心的な団体のひとつが、今回私どもと連携をとらせていただいたボランティア組織「未来子育てネット パンピー」（以下、パンピー）となります。

パンピーの活動は多岐にわたりますが、特にダンスの取り組みは活発であり、元気あふれるそのダンスを、高齢者施設や福祉施設で披露する活動（慰問活動）の中で、施設居住者・利用者の方々へ、心からの応援メッセージを届けつつけています。また、静岡市の春のお祭りである「静岡まつり」や、清水の夏のお祭りである「清水みなと祭り」、また、静岡市の秋のお祭りである「静岡おだっくい祭り」等で、会場に訪れる数多くの方々へ「親子によるダンス」を披露することによって、街の活性化にも寄与しています。加えて、ダンスを人前で披露することは、母親・子ども自身の「生きる自信」を高めることにもつながっているようです。

しかしながら、これまでのパンピーのダンスは、既存の音楽を利用し、既存のダンスを踊るというものでした。誰もが知っている有名な音楽でダンスを踊ることは、それはそれで価値のあることではあります。た

だ一方で、いわゆるマンネリ感も否めませんでした。このような中、会の活動をより活発にし、「母親と子どもの絆」をより深めていくためにも、『自分たちの曲で、自分たちのダンスを一から作り上げていきたい。そして踊りたい。』というニーズが高まっていました。

そこで、私どもとの連携をとらせていただく中で、親子が楽しく取り組めるためのダンスの創作活動に必要な曲づくり（業者委託）を行い、その後にダンスの創作活動・練習会、そして、その作品を様々な場所で披露する活動を展開していくこととなりました。

この親子でダンスを披露する活動を通して、これをご覧いただく多くの市民の方々へ、「子どもと共に汗を流すこと、身体を使いながら新しい表現を創作すること、親子が同じステージに立って作品を披露すること、の教育的価値」、また、「ダンスを踊りきった後の達成感を親子で共有することの教育的価値」等を、感じ取っていただきたいと考えました。

特に、子どもとの関わり方に悩みを抱えていらっしゃる母親の方々、また、母親同士のネットワークの構築が苦手な家でこもりがちとなり、いわゆる母子カプセルのなかでの子育ての閉塞感に辛い思いをさせている母親の方々に、「母親と子どもの絆」を深めるためのダンスの創作活動の素晴らしさを伝え、ご本人のご希望があれば、ご一緒に活動に参加していただきながら、子育ての悩みを少しでも軽減していただきたいと考え、本事業を行ったものです。子育て中の多くの方々へ、少しでもエールを送れたらと考えました。

2 本プロジェクトチームの構成

プロジェクトチームは、教育実践研究・保健体育教育研究を専門とする赤田研究室のメンバーと、パン



日本 PTA 関東ブロック研究大会でのダンスの披露



静岡駅地下街でのダンスの披露（おだっくい祭り）

ピーのメンバーで構成しました。赤田研究室では、これまでの社会貢献活動として、静岡県下の学校敷地内完全禁煙化の実現に寄与し、また、静岡市内の複数の放課後児童クラブ（学童保育施設）の設立に尽力しており、この子どもの健康を守るための研究姿勢、男女共同参画社会の実現に向けた活動姿勢が、母親を中心メンバーとするパンピーの関係者に評価され、パンピーの関係者から依頼を受ける中で、今回の連携に合意形成がなされ、本プロジェクトチームが構成されました。

3 活動内容

まずは、ダンスの曲づくりに取り掛かりました。母親メンバーのダンスのイメージを文章化し、それを楽曲作成会社へ伝えながら、曲づくりを進めました。何度もやり取りを繰り返し、細部にまでこだわった世界にひとつだけのオリジナルの楽曲を完成させました。次に、親子で踊るダンスの動きづくりに取り掛かりました。週2回、2時間の練習を2か月実施することで、オリジナルのダンスを完成させました。完成したダンスは、地域の方々（ご高齢者）に、先ずは見ていただき評価を受けました。9月には、静岡おだっくい祭りで5回、また10月には日本PTA関東ブロック研究大会で1回ダンスを披露し、多くの方々から称賛の声をいただきました。その後、活動報告を兼ねての新規メンバー募集のパンフレットを作成し、静岡市内小学校の地域公開日等でそれを配布しました。具体的な活動の様子は写真に示す通りとなります。

4 今後の取り組み

今回の事業は、「子育て支援の一環」として、ボランティア団体であるパンピーとの連携を図っていきました。パンピーのメンバー自身が、ダンスを通じた親子の関わりの中で、親子の絆をさらに深め、同時に、自己表現することの大切さを再認識していきました。また、このような活動の価値を、様々な形で周知できたことにより、他の子育て世代の方々にも、子育てにおける活動の選択肢のひとつを提供できたと思います。

子どもはあっという間に成長し、年度ごと、パンピーのメンバーも入れ替わりが生じますが、これからも、今回創作したダンスを大切に踊り続けていただきながら、親子の絆をさらに深め、そして、子育て世代の多くの方々へエールを送り続けていただけたと思います。



母親と子どもと一緒に踊るダンスの練習場面



地域の方々をお招きして新しく創作したダンスを披露



大勢の地域の方々を前にしてのダンスの披露



静岡おだっくい祭りではステージ上で他の団体との共演も



活動報告も兼ねた新規メンバー募集のパンフレット

幼児指導絵本『あそび』と静岡の絵本文化 —静岡県立中央図書館との連携—

平野 雅彦 | 人文社会科学部 客員教授

1. 概略

『幼児指導絵本あそび』（以下『あそび』）とは、社会福祉法人 静岡事業福祉協会（静岡市葵区上足洗）が、主に東海地区、甲信越の一部を販売エリアとして編集発行していた幼児教育絵本（昭和20年代～50年代発行 現在廃刊）である。このわずか20ページ足らずの「絵雑誌」には、発行当時既に活躍していた絵本作家や画家、作曲家、詩人らが多数執筆していた。ところが、昭和50年代に入り競合他社が乱立、激化するなかで、廃刊に追い込まれる。ローカル誌や発行部数等の問題もあり、本誌はその後まったく研究・考察されていないという現状にある。

本プロジェクトでは、この『あそび』を、「地域連携」（3にて記載）の視点を強調しながら、基本情報をできる限り詳らかにしていくことを第一の目標に据え、次なる第二弾と考える「日本の絵雑誌の中に位置づける」基礎研究とする。

2. 連携における社会的意義

地域連携プロジェクトにおける3つの学術的・社会的意義

2-1) 研究価値としての『あそび』

武井武雄、いわさきちひろ、赤羽末吉、林義雄、黒崎義介、長新太、馬場のぼる、おおば比呂司、朝倉拱、服部公一ら多数の豪華執筆陣が筆を奮っていた『あそび』。個別の作家ごとには作品集などが出版され、評価も確立されているものの、時代や絵本史に位置づけられた『あそび』全体の役割、存在意義というものはまったく研究が進んでいないのが現状である。

2-2) 地域連携という視点

連携先の静岡県立中央図書館は、館内に研究機関「子ども図書研究室」を有し、児童書の収集・研究において、多くの成果を出している。今回の発表会では、ただ会場を借りるのではなく、未だ詳らかになっていない『あそび』を通じ、外部の専門研究機関と大学が一体となって研究を進めて行くことの意義は極めて重要で、まさにそこには「地域連携」としての根本的な姿があるとみる。

2-3) 今このタイミングというチャンス

『あそび』に関する研究成果はおそらくこれまでは皆無に等しいだろう。歴代の編集長も存命わずかとなってしまった現在、今このチャンスにしか、聞き取り等詳細が残せない状況にある。

また今回の調査で発見された、歴史的、美術的価値の高い約50枚強の原画（2013年3月現在）も、保存状態が悪く、未だ公の評価がなされないまま、千代田保育園（静岡市葵区上足洗）の体育館や倉庫にしまわれたままになっている。

3. 連携を仮定義する

そもそも連携とはなにか。だれがどのような状態になったことを連携と呼ぶのか。この議論、定義がされないまま多くの組織・団体が、物事に取り組もうとしているようにみえる。

そこで、この『あそび』の取り組みでは連携を以下のように整理した。あくまでも、主語は「大学」である。よって、連携という視点で物事に取り組む組織や団体は、それぞれを主語に据えて、イメージしてみるとわかりやすいだろう。

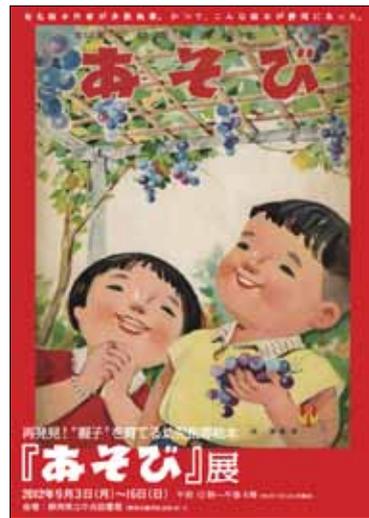
- 3-1) (大学は) 地域や他の組織と同じ机につき、互いの課題を出しあい、理解しあうなかで、互いの経験や人的相互の能力を提供しあうことで(相互乗り入れ)、それぞれの研究テーマを深め、課題を解決していく。また同時に、テーマの重なる部分を取り出し、社会的問題を解決していく。
 - 共有知の集積と利用により社会的問題の解決
 - コンソーシアムの模索
- 3-2) (大学は) 地域や他の組織とつながることで、大学の知を深め、学生が大学生活をより豊かなものにしていくことを目指す。
- 3-3) (大学は) 大学教育におけるリベラルアーツの重要性を再認識し、視点・視野を広げ、その深度を深める。

4. 連携における期待

静岡県立中央図書館との連携で期待されること。

- 4-1) 静岡県立中央図書館との共同研究による新たな視点の発見。

- 4-2) 共同研究発表による全国の公共図書館を中心とした発信が可能となる。
- 4-3) 絵本学会等での新たな発表の場が期待できる。
- 4-4) 国立国会図書館や全国の公共図書館とのネットワークが容易となる。
- 4-5) 展示、講演（パネルディスカッション）、ワークショップ等による今回の発表の場は、主に静岡県民へ向けた静岡大学の研究を通じた認知度のアップにつながる。
- 4-6) 波及効果として、本研究の発表により、同分野の研究が深まる。



『あそび』展ポスター

5. 『あそび』研究チームの組織体制

名称: チームこんぺいとう（学生による提案で決定）
 実施責任者: 平野雅彦（人文社会科学部客員教授）
 人文社会科学部学生 8 名:

岩科律子, 大野さやか, 勝又友香理, 杉浦充俊,
 長島睦, 原野楓, 三尾和久, 村松文佳

なお、本プロジェクト実施に於いては随所で、今野喜和人人文社会科学部教授にアドバイスを頂いた。

6. 研究発表会

本プロジェクトでは研究発表の場として、以下の取り組みを行った。

- 再発見！親子を育てる幼児指導絵本『あそび』展
 実施日：2012年9月3日（月）～16日（日）
 都合13日間 ※11日休館

●研究発表展示会の内容

6-1) 展示発表

『あそび』本誌と原画、編集関連の写真等の展示。
 会期中全日

6-2) 読み聞かせ

『あそび』を使った読み聞かせ。元『あそび』の編集長平野ますみ氏に指導を仰ぎながら実施。また静岡図書館友の会の協力を得て実施。

9日（日）、16日（日）各回午前・午後それぞれ一回

6-3) 工作教室

来場者と『あそび』発行当時の付録を再制作した。
 8日（土）、9日（日）、15日（土）、16日（日）それぞれ終日開催

7. 成果の検証

「4, 連携における期待」と通し番号を照らし合わせながら検証をする。

- 7-1) ・静岡県立中央図書館のコレクションにより、展示の厚みが可能となった。



『あそび』展における読み聞かせ。どの会も満席となる。

- ・研究発表会における告知のチャネルとチャンスが増えた。

- 7-2) 静岡県立中央図書館の情報媒体により全国の公共図書館とその利用者に情報発信が可能となった。
- 7-3) 学会参加と発表は今後の課題である。
- 7-4) 静岡県内の複数の市立図書館からの、本発表会持ち回り企画の打診があった。今後詰めて行きたい。また、全国発信のために、国会図書館や静岡県立中央図書館との共同研究チームを立ち上げたい。
- 7-5) 一日当たり、約50人平均の来場者があり、アンケートに回答してもらっているが、「このような絵雑誌が静岡から発行されていたことを初めて知った」「次回の発表会も期待したい」の声が多数あった。また、マスコミによる注目度も高く、都合5回の取材を受けた（新聞4回一部写真参照、並びに学生によるラジオ出演＝FM放送K-MIX 9月4日）。これらの告知により、今回の目標の一つである広く（主に）県民に「かつて静岡からこのような絵雑誌が発行されていた」という認知と理解へとつながった。

これら成果は連携の視点があつたればこそ可能になったことで、我々研究チームだけの活動ではなしえなかったことである。

また我々がこの発表までに費やした2年の期間、元『あそび』の編集に携わった人物らを探しあてることは不可能だったが、これを機に約20名の元編集者らとコンタクトとることができ、当時の詳細な取材ができ、貴重な原画の新たな発見にもつながった。

7-6) 以下の波及効果

- ①学生による卒業論文において、本研究を深めることになった。
- ②他の図書館からの要請で同研究発表会を他館でも実施した。(静岡市立中央図書館)

8. 今後の課題

- ①「絵本学会」において、論文の発表を行い、『あそび』を絵本史に位置づける。
- ②原画の公的機関への寄贈・保存活動をすすめる。
- ③『あそび』に執筆していた作家らの、各々の研究機関との連携や全国紙の告知を視野に入れる。
- ④「3. 連携を仮定義する」に対応して考察するなら、「3-3 (大学は) 大学教育におけるリベラルアーツの重要性を再認識し、視点・視野を広げ、その深度を深める。」の検証の仕方そのものに課題が残る。



静岡新聞 2012年9月13日掲載



静岡新聞 2012年9月4日掲載



静岡新聞 2012年8月26日掲載



静岡新聞 2012年9月25日掲載

※このほかマスコミ取材は、静岡新聞 2012年9月6日掲載、FM放送K-MIX(2012年9月4日)とがあった。

中小企業の情報化推進と社会人基礎力を育む IT 経営実践道場

田中 宏和 | 情報学部 教授

1. はじめに

浜松市は全国有数のモノづくりの産業集積地のひとつである。しかし、町工場の廃業が多く産業基盤の衰退が進行しており、IT を活用した経営の効率化と戦略的活用を図ることが求められている。そこで、地域産業の将来を担う次世代の経営者を対象にした IT 経営実践道場を産学連携によって行い、小規模中小企業の情報化を推進する方法論を実践的かつ主体的に学ぶ機会と場を提供するプロジェクトを行った。

2. 本プロジェクトの特徴

本プロジェクトの特徴は以下の3点である。

(1) 学生と社会人が共に学ぶ場の提供

実践道場では学生と社会人が交流しあいながら学ぶ場になっている。

(2) 「講義」→「討議」→「実践」の学びの場の提供

「講義」によって知識を習得し、ワークショップ形式の演習主体の「討議」(ケース研究)では知識の定着を図り、最後に「実践」(アクティブラーニング)によって知識の応用力を身に着ける、連続した体系的なプログラムを構成した。

(3) 産学官連携による学びの場の提供

本プロジェクトは、浜松商工会議所殿、遠州信用金庫殿、浜松信用金庫殿、磐田信用金庫殿、掛川信用金庫殿の後援を得ることができた。これらの機関の広報ルートを使って若手経営者を募った。

3. 実践道場のプログラム

講義と討議は平日夜間(19時～21時)と土曜日(10時～12時)を利用して行った。実践は3つの案件を立ち上げ、適宜実施した。

【講義】

- ①受注をとる交渉術(10月4日)
- ②販路開拓のマーケティング(10月13日)
- ③勝つためのプレゼンテーション(10月18日)
- ④金融機関がチェックする財務諸表のポイント(10月25日)
- ⑤ITを使った業務改善の進め方(11月1日)



実践道場での講義風景

【討議】

- ①展示会・商談会の成功ストーリー構築(11月8日)
- ②ケースで学ぶ販売戦略(11月15日)
- ③商談を成功に導くビジネスマナー(11月24日)
- ④ビジネスゲームによる経営者能力のパワーアップ(11月29日)
- ⑤ケースで学ぶITを使った業務改善(12月15日)



実践道場での討議風景

【実践】

- アクティブラーニングとして3つの案件を行った。
- ①浜松市内のメッキ業者4社による共同受注による販路開拓
 - ②製造業H社の部品管理システムの構築
 - ③経営者を対象にした簡単プログラミングABCセミナー

4. 実践道場「講義」、「討議」の評価

受講者100名を集客目標としたが、実際には社会人20名、学生25名程度であり目標には届かなかった。その要因として、初めての試みであり認知されにくかったことと夜間と休日開講であったことがあげられる。

内容的には、学生にとっては経営学の知識が無いと理解が難しい講座もあったが、アンケート結果をみる

と社会人も学生も概ね好評であった。また、「討議」では、学生と社会人が同じチームになって、ビジネスゲームやケース教材を使った演習ができるようにしたので、学生にとっては貴重な経験になった。

5. 実践道場「実践」(アクティブラーニング)の評価

①共同受注による販路開拓

メッキ業界の若手経営者たちが共同で県外のメーカーから受注を獲るための方策を検討し、学生も討議に加わって企画書づくりに臨んだ。



ビジネスモデルの企画づくり

静岡市、名古屋市で開催された展示会では静大ブースを拠点に、学生と経営者がペアを組んで来場者や出展ブースの企業を対象にインタビュー調査を行った。



マーケティング調査

アクティブラーニングの終了後、共同受注の会社が立ち上がり、何件かの商談が成立するなど成果があがっている。

②部品管理システムの構築

遠州信用金庫の協力を得て、H社の業務改善に取り組んだ。学生はシステム開発プロジェクトに参画した。

組織改善と業務改善のプロセスは、教員と信用金庫のコンサルタントが担い、システム設計とプログラム作成は教員の指導のもとで学生が主体的に担う形にした。



システム設計案を学生が説明する

③簡単プログラミングABCセミナー

学生がオリジナルテキストを作成し、それをもとに経営者にプログラムの基本とアプリケーション開発の基本操作をワンツーワンで個別指導を行った。



経営者に学生がワンツーワンで操作指導をする

6. おわりに

情報学部では卒業後はIT企業に就職し、システムエンジニアの職業を志望する学生の割合が多い。大学ではシステム開発に関する知識を習得してもそれを実践する場は少ない。実際のシステム開発の現場では、組織の問題や人の意識の問題にまで立ち入って業務改善することが必要とされている。一方で、企業側ではシステム導入には高額な費用負担が強いらられるだけでなく、業務改善をどのような手順で行い、システム導入をいかに推進するかについての知識が乏しい場合が多い。

学生と企業が参加する実践道場では、学生は現実のビジネスに関わることで社会人基礎力が向上し、企業側は自社の業務改善や販路開拓などの経営革新を大学の力を借りて行う機会となる。両者に共通しているのは「気づき」と「学び」である。実践道場はそれを実現する場である。

世界の遊びとスポーツでつながる！ 異文化交流プロジェクト

矢崎 満夫 | 教職大学院 准教授

1. 本プロジェクト実施の背景と目的

2011年の法務省の調査によれば、静岡県には8万2000人あまり(全国第8位)の外国人が在住しているとされています。また2010年の文科省調査では、県内の公立小中学校に在籍する「日本語指導が必要な外国人児童生徒」の数は、全国第3位の2383名となっています。そうした状況下にある静岡県では、地域において外国人と日本人とがいかに「多文化共生」の社会を形成していくかが、今後考えていかなければならない大きなテーマの1つとなるといえます。

本プロジェクトチームの学生メンバーたちは、以前より静岡市教育委員会との連携のもと、市立小中学校の教育現場に赴いて外国人の子どもたちを取り巻く環境に働きかける支援を展開してきました。その中心にある理念が、「つながりづくり」の支援です。外国人家庭の子どもたちは、学校や地域の中で様々な「つながり」を失った状態にあることが少なくありません。たとえば親の仕事の都合で突然来日することになった場合、「日本語とのつながり」も「友だちとのつながり」も、何もない状況で日本に来ることになります。そのような状況を少しでも改善できるように、学生ボランティアたちは学校現場に入り、日本語や日本の生活習慣との「つながり」や、クラスの友だちや担任の先生との「つながり」ができるように支援を行っています。

本プロジェクトでは、静岡県の将来的な多文化社会の到来を想定し、日本人と外国人の子どもたちとが異文化の壁を乗り越え、互いに認め合い、力を合わせて新たな地域社会を形成していく「多文化共生を目指したつながりづくり」を目的に、世界の遊びとスポーツを通じた異文化交流活動を実施することにしました。

2. なぜ「世界の遊びとスポーツ」なのか

来日して間もない外国人の子どもたちは、日本の言語や文化・習慣という壁によって、日本人の子どもたちとのコミュニケーション等に悩み、生活になじめないことも少なくありません。このような子どもたちの実状を踏まえ、本プロジェクトでは、比較的言葉を使わなくても「つながり」が実感できる「遊びとスポーツ」に着目しました。また、「世界の——」とした理由は、

外国人と日本人の子どもたちそれぞれが、独自の「遊びやスポーツ」を相互に紹介し合うことによって、より意義深い「異文化交流」の活動が展開できるのではないかと考えたからです。

3. プロジェクトの実際

本プロジェクトは、①静岡市(2012年11月)、②三島市(同11月)、③富士市(2013年2月)の3地区において実施することができました。それぞれのイベントを行う上では、静岡市内小中学校で外国人の子どもたちの日本語や教科学習の支援活動等を行っている「NPO法人ONES」に全面的に協力を仰ぎました。その他、①では静岡県立大学のボランティア団体「にょっき☆」、②では、三島市内で学習支援を行っているボランティア団体「のびっこクラブ」と日本大学の学生サークル「アモール」、③では、富士市のブラジル人学校「エスコラ・フジ」とその近隣の「富士市立富士第一小学校」と連携しながら進めていきました。



写真1 フィリピンのバンブーダンスの様子(三島市)

本プロジェクトを遂行するにあたって一番の問題となったのが、参加する外国人と日本人の子どもたちをどのように集めるかでした。結局、1回目の静岡市では思うように事前に参加者を集めることができなかったという反省から、三島市のイベントでは「のびっこクラブ」に協力をお願いし、当該団体が支援している外国人の子どもたち7名と、地域の少年バスケットボールチームの小学生たち9名が参加してくれてイベントを行うことができました。参加者はあまり多くな

かったものの、ボランティア学生たちのがんばりもあって、フィリピンの「バンブーダンス」(前ページ写真1)などの遊びを行い、子どもたちは楽しそうに活動していました。しかしながら、三島市でのイベントにおける反省点として、「すべて主催者側が用意した遊びを提供する形になり、子どもたちは遊びの場を楽しんではいなかったのではないか」ということが挙げられました。たとえばバンブーダンスにしても、せっかく参加者の中にフィリピンの子もがいたのだから、学生が紹介するのではなくて、その子どもに先生役をやってもらう等の仕掛けが必要だったのではないかとということでした。



写真2 日本人とブラジル人がドッチビーで交流(富士市)

そこで3回目の富士市では、すでに学校間での交流があった「エスコラ・フジ」と「富士市立富士第一小学校」に対して本プロジェクトの説明を行ったところ、賛同を得ることができ、各校において参加者を募集して下さることになりました。これは、学校間の交流があるとはいってもそれは年数回のことであり、地域における日本人と外国人との将来的な「つながりづくり」のためには、本プロジェクトが何らかのきっかけとなり得ると、関係者が考えた結果といえるでしょう。両校の関係者とイベント内容について相談し、実施する遊び&スポーツはブラジルの「旗とりゲーム」と日本の「ドッチビー」(写真2)に決まり、両国の混合チームで対抗戦を行ったり、ブラジル人と日本人の子どもが相互にやり方を説明し合う形をとったりすることにしました(写真3は、ブラジル人の子どもたちが日本語で「旗とりゲーム」の説明を行っている場面)。



写真3 ゲームの説明を行うエスコラ・フジの子どもたち



写真4 ブラジルの焼菓子や日本の駄菓子の販売

さらには、小学校からの要請で地域の駄菓子屋さんが出店したり、ブラジル人学校の校長先生が自らブラジルの焼菓子を作ったりしてくださり、食文化を通しての相互交流も行うことができました(写真4)。

4. プロジェクトの成果と今後の展開

特に富士市でのプロジェクトでは、地域の学校と連携を図ることができたため、参加者の募集が円滑に進み、総勢40名ほどの子どもたちが参加してくれました。事後アンケートの結果からは、ほとんどの子どもたちが「参加してよかった」「新しい友だちができた」という回答を寄せてくれており、両者の仲介役を担ったボランティア学生たちも、大きな満足感が得られたようです。やはり遊びやスポーツは、異文化の壁を超えて交流できる、素晴らしいツールとなることが実感できました。今後もこの成果を一過性のものに終わらせないよう、同様の企画を続け、地域におけるさらなる「つながりづくり」に貢献していきたいと思います。

ものづくりを通しての「環境啓発」プロジェクト

井上 直巳 | 技術部 技術専門職員

「地球温暖化」「酸性雨」「オゾン層破壊」などといった地球環境問題は、世界の多くの人の知るところである。しかしながら、身近な環境問題に関心を持ち、日常的に環境に配慮した生活を送っている人は少ない。これは、環境問題と人の生活の関係が十分に理解されていないことや知識不足が起因していると考えられる。

そこで、身近な環境問題に視点を置き、そこから環境問題を再考する目的で、親子を対象に静岡市沼上資源循環センター啓発施設（以下、啓発施設と表記）と連携して「環境啓発講座」を開催した。この「環境啓発講座」は、技術部が行う環境に関する「ものづくり講座」と啓発施設が行う「啓発施設講座」を組み合わせた講座で5回行った。技術部には、さまざまな専門分野の知識を持った技術職員がおり、大学における実験・実習の技術指導に取り組み、ものづくりの知識や経験が豊富である。一方、連携先の啓発施設は、「人やものを大切にすることを基本理念として、多くの人に4R（Refuse, Reduce, Reuse, Recycle）の意義を知っていただくために、施設内の「展示施設の見学」や「ゴミの減量とリサイクル」講座などを開催したり、環境大学を開校しさまざまな環境啓発に取り組んでいる。この両者が連携することで、より一層の「環境啓発」が期待できる。5回行った講座の内容は以下のとおりである。

【ものづくり講座】

★第1回 8月25日（土）「放射線を見てみよう！」（主担当：宮澤）参加人数29人（子供11，大人18）

本講座では、ガイガーカウンター、放射線源、遮へい材などを使用し、放射線に関する簡単な実験・講義を行った後、簡易放射線測定装置で様々な場所での放射線量を測定した。その後、簡易霧箱キットを作成して放射線を目で見てもらい、放射線への理解を深めた。

★第2回 9月29日（土）「リサイクルお茶ペーパーをつくろう！」（主担当：市川）参加人数24人（子供11，大人13）

本講座では、紙が植物の繊維（セルロース）を取り



第1回「放射線を見てみよう」の様子

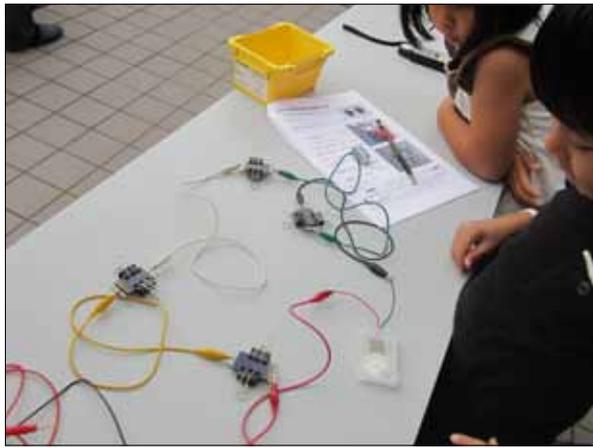


第2回「紙すき」の様子



第3回「光の吸収実験」の様子

出して作っていることや原料や作り方の違いによって、和紙や洋紙などの紙が作られていることなどを講義した後、牛乳パックから作ったパルプとお茶殻を使って、その後、紙すきを体験した。そして、出来上がったお茶ペーパーで団扇を作り、静岡特産の「お茶」と資源のリサイクルについて楽しみながら学んだ。



第4回「太陽電池の発電実験」の様子



第5回「作成した廃油キャンドル」

★第3回 10月13日(土)「太陽の光でお湯をわかそう！」(主担当:井上) 参加人数10人(子供3,大人7)

本講座では、エネルギー資源の現状や再生可能エネルギーの代表でもある太陽エネルギーについて講義した後、厚紙にアルミを蒸着させたガスレンジシートを使って、パネル型の集光器を製作した。6種類の色を塗ったアルミ缶をそれぞれ集光器の中央に置き、色による光の吸収の違いを実験した。また、パラボラ型の集光器でゆで卵を作って食べてもらい、太陽エネルギーの利用を実感した。

★第4回 11月3日(土)「太陽電池を作ってみよう！」(主担当:高橋) 参加人数29人(子供16,大人13)

本講座では、太陽電池の種類や原理を講義した後、ハイビスカスの花から色素を取り出し、酸化チタン膜を焼き付けた導電性ガラスに色素を吸着させて、色素増感型太陽電池を製作した。また、作った太陽電池を数個直列につなぎ、光をあてて電子オルゴールを鳴らし、光から電気が作れることを体験した。

★第5回 12月15日(土)「オリジナルの廃油キャンドルを作ろう！」(主担当:楠) 参加人数26人(子供11,大人15)

本講座では、資源の有効利用やゴミの減量化について講義した後、家庭から出る廃油を利用してキャンドルを作製した。廃油をキャンドルとして再利用することで「捨てればゴミ、生かせば資源」という環境教育にとって大切なキャッチフレーズを学んだ。また、作製したキャンドルには、色を付けたりアロマオイルを入れて、参加者のオリジナル性を出し、実際に火をともし観賞した。

【啓発施設講座】

静岡市の沼上資源循環センター啓発施設は、市民の環境意識の醸成を図る目的で、平成23年5月に開館しました。当施設では、よりよい環境を次世代に継承するための人材育成を図るために、環境に関する専門的知識が学べる「環境大学」を開校しています。学長は市長が務め、県内外の大学教授を中心とした講師陣が世界的な環境問題から住環境に至る幅広い授業を行います。また、ごみ減量・4R推進(Refuse, Reduce, Reuse, Recycle)のために、学校や各種団体などを対象にごみ減量・リサイクル講座や子供服のリユースマーケット、植物繊維と雑紙から作った紙を使用した「もったいない張り」などの各種講座も開催しています。

今回の静岡大学との連携においては、参加していただいた小学生や保護者を対象に、「ごみ減量・リサイクル」についての講座と施設内見学を行いました。大学の「ものづくり講座」を受講した親子の参加者は、講座内容のすばらしさに加えて、学生との触れ合いに喜びを感じているようでした。一般市民にとって、大学教育の一端を学外の施設でも習得できることは大変有益であり、大学を身近に感じられたものと思われま。資源循環センター啓発施設にとっても大変有意義であり光栄なことでした。ここに感謝の意を表します(文責:啓発施設 重岡廣男)。



啓発施設講座の様子

【プロジェクトメンバー】

- ・技術部静岡分室教育研究支援部門
井上直巳, 宮澤俊義, 楠賢司, 市川佳伸, 森内良太
- ・教育学部学生
高橋秀平 (M2年), 三浦早也香 (M2年),
森下明里 (学部2年), 渡邊早彌香 (学部2年)
- ・静岡市沼上資源循環センター啓発施設
重岡廣男, 大畑和代, 瀬本みすず

【環境啓発講座を終えて】

各講座終了後、参加者に「環境啓発講座」に対するアンケート調査を実施した。5回の講座で合計107人(子供46人、大人61人)の回答が得られた。このアンケート結果から参加者は、ものづくりを楽しみながら行い、環境について関心を深めてもらえたことなどが分かり、当初の目的も概ね達成できた。また、5回の講座の内、第1回と第2回が新聞報道され、第5回

がテレビ放送(静岡朝日テレビ 平成24年12月23日放送 Team Earth)された。このようなメディアでの露出といったことも、大学と地域の距離を近くする意味でひとつの成果であると考えます。

半年に及んだこのプロジェクトを遂行するにあたり、教育学部の学生もメンバーに加わった。第4回「太陽電池を作ってみよう!」を大学院生の高橋君を中心に学生4人で担当してもらった。講座の企画運営をすることや参加者の子供たちとコミュニケーションをとりものづくりをしたことは、将来、教員を目指す学生にとって大切なものを得たはずである。また、我々技術職員もそれぞれの専門分野を活かしながら技術力や指導力の向上に取り組めたことは、有意義なことであった。この経験を活かし、今後も地域貢献活動を行っていきたい。



第1回講座の新聞記事

中日新聞 (平成24年8月26日 朝刊)



第2回講座の新聞記事

静岡新聞 (平成24年10月2日 朝刊)

遊びや体験活動を通して学びに熱中する子ども育成の場 「ちびっこ寺子屋」プロジェクト

松永 泰弘 | 教育学部 教授

河村 翔太 | 教育学部技術教育専修 大学院2年

1. はじめに

教育学部に入学し、教育実習を終えて、まず感じたことが、大学生の“つながり”のなさでした。ほとんどの大学生が同じ学科、同じサークル、同じバイト先だけで学生生活を終わってしまう。自分が学んだこと、考えていること、取り組んでいることを、広く話したり、伝えたり、試したりできる場があまりにも少ない。教育実習を除けば、ほとんどの学生は自分の慣れ親しんだコミュニティしか知らずに大学を卒業してしまうのではないかと感じていました。またその一方で、学生の中には大学生活で自分たちが身に付けた技術や知識を地域社会のために使いたい、自分も社会の役に立ちたい、と考えている人も少なからずいるという現状を知ったのもこの時です。

そんな気持ちを持った学生で結成されたのが「コトコトプロジェクト」です。コトコトプロジェクトとは、有志で活動されている地域住民のみなさんに、静岡大学の学生が加わった子育て支援団体であり、「『個』と『子』をつなぐための『事』や『言葉』をテーマに、子どもたちの居場所や地域のコミュニケーションの場を作る」をテーマとして活動している組織です。

本事業では、コトコトプロジェクト主催のイベントを開催し、その中の一つのブースとして、大学生が各学科の特徴を活かした体験教室を開催する、「ちびっこ寺子屋」を実施しました。

2. ちびっこ寺子屋

ちびっこ寺子屋では、「子どもたちに遊びや体験活動を通じた学びを提供する場」という趣旨のもと、技術科・理科・音楽科・美術科などが、それぞれの持ち味を活かしたブースを展開しました。開催日時・担当教科は以下のように分担しました。

- ・第1回 2012年10月28日(日)
技術科・音楽科・美術科
- ・第2回 2012年12月23日(日)
理科・美術科
- ・第3回 2013年2月24日(日)
技術科



ちびっこ寺子屋の様子
(上：音楽科、中：技術科、下：美術科)

第3回目は主催場所の都合で場所が移動となり、縮小しての開催となってしまいましたが、第1回・第2回とも参加した子どもたちやその親御さんたち、また、地域の住民のみなさんや、他の出展者のみなさんに大変好評でした。

今回開催した内容は、技術科が色々な道具や材料を用いておもちゃを製作する「ものづくり教室」、音楽科が様々な楽器を用意して、自由に遊ぶことができ、さらに音楽科・吹奏楽部の学生によるミニコンサートなども開催される「おんがくのひろば」を行いました。また、美術科は、「おんがくのひろば」で使える「楽器作り」、クリスマスシーズンにはオリジナルリースが作れる「クリスマスリース作り」を、理科は不思議な現象を体験したり、自分で不思議なおもちゃを作ることもできる「科学教室」をそれぞれ実施しました。

参加した子どもたちは、音楽科や技術科で色々な道具や楽器に興味を持ち、新しいものに挑戦しようと努力している姿が多く見られました。また、理科の実験教室では不思議な現象を解明しようと何度も挑戦したり、美術科のクリスマスリース作りでは自分だけのオリジナルリースを作ろうと楽しそうに作業している様子がみられました。

参加した学生たちも、子どもたちと、他の学科の学生と、さらには地域の人たちと協力しながらイベントを進めている様子がみられました。イベントを終えての感想を聞いたところ、「普段は経験できないことができた」「色々な人と話ができ、刺激になった」「これからもこのような活動を続けたい」と回答する学生が多く見られ、学生たちにとっても価値のある体験になった様子がうかがえました。また、子どもたちの素朴な疑問や発想の中には、自分たちの中にはなかった価値観や考え方があり、改めて自分の教科の魅力を感じ、もっと勉強しなければ、と思い直す学生も見られました。このイベントをきっかけに、さらに教師になりたいという思いが強くなった学生の声も聞かれました。

さらに、主催側の方や参加した保護者からは、「学生が手伝ってくれるから非常に助かる」「このような活動は次にどこで開かれるの?」といった声もかけていただき、学生たちの力や技が、地域社会に少しでも貢献できていることがわかりました。地域住民の中にも、近年、地域住民同士のつながりが薄くなってしまっていると感じている方も見られ、その方からは「学生が中心となって、地域を盛り上げて行ってほしい。このような活動を続けてください」と声をかけていただきました。

メインとなった技術科・美術科・理科・音楽科の他にも、英語科、国語科、数学科、総合科学科など様々な学科や、吹奏楽部所属の学生などもイベントに参加し、会場を盛り上げることができました。今回のイベ

ントでは第1回目、第2回目ともに25名以上の大学生が参加し、学科や学部の垣根を越えたイベント開催が可能となりました。



ちびっこ寺子屋の様子

(上：吹奏楽部によるミニコンサート、下：理科)

3. さいごに

本事業では、教育学部の様々な学科の学生と地域住民とが協同して、子どもたちに価値ある体験を提供することができました。また、子ども・学生・地域住民が協同してイベントを開催することで、様々な場面で“つながり”を実感しました。このようなイベントでの体験は、子どもたちにとっても、学生たちにとっても、また、地域住民のみなさんにとっても、大きな意義のあるものであったと感じています。

来年度からもコトコトプロジェクト及びちびっこ寺子屋を継続して行えるよう、本事業に参加し、メインで企画を実施した技術科・音楽科・美術科・理科それぞれで次年度の代表者が決まり、次のイベントに向けて着々と準備が始まっています。次回は5月に、再びちびっこ寺子屋を開催する予定です。

自主防災活動に男女共同参画・多様性配慮の視点を導入するための研修者養成サポート事業

池田 恵子 | 教育学部 教授

1. 事業の目的と組織

災害時には、女性と男性とで、また年齢、障がいの有無と種類、国籍などによって、それぞれに違った形で多様な困難（生活環境、物資、炊き出し・介護・子育て、就労、復興への参画など）に直面することになります。多様な被災者のあり方に配慮した防災体制を備えることで被害を軽減できることが、東日本大震災の経験からも明らかになっています。国が示す「防災基本計画」にも、女性・子どもへの配慮や避難所運営等の対応など、具体的な対策に踏み込んだ記述が盛り込まれるようになってきました。

静岡県は、自主防災活動が盛んです。大災害の発生時に、まず現場で活動を開始し復興までかわるのは地域の自主防災組織です。自主防災組織が、男女共同参画・多様性配慮の観点に基づいた有効な対策を実施できることが求められています。本事業は、そのための普及モデルが示されることを目的に行われました。

事業実施組織は、県危機管理部情報課、県地震防災センター、池田恵子（本学教育学部教員）、浅野幸子（東京女学館大学非常勤講師）、宇田優里（教育学部4年生）、栗田奈美、笹本絵里（同3年）により構成されました。

2. 事業の経過

県危機管理部情報課と県地震防災センターの助言に

より、県内の3つの市町からモデルとなる自主防災組織を以下の通り選定しました。

- ・掛川市大淵地区自主防災会
- ・長泉町西区自主防災会
- ・焼津市小川第12自主防災会

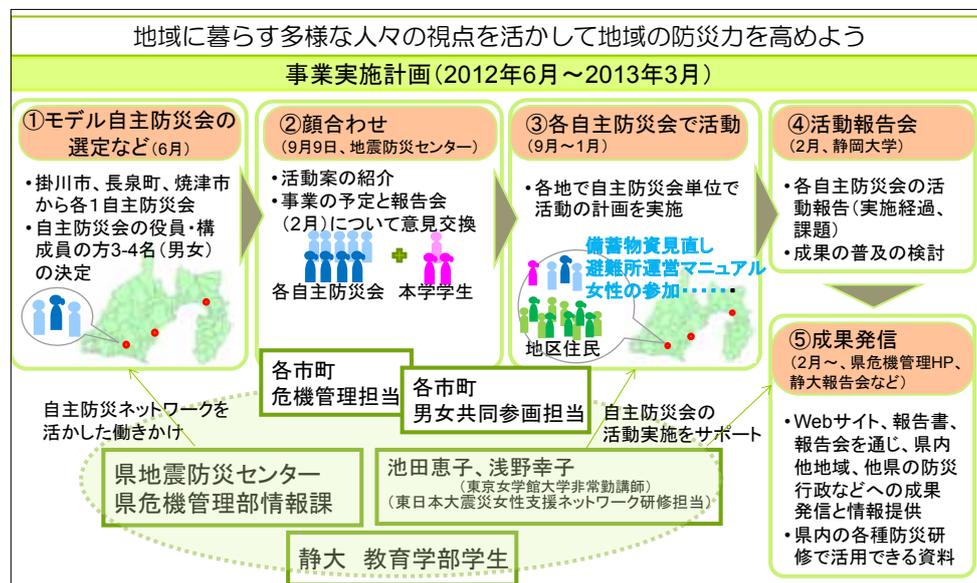
選定にあたり、事業の目的を踏まえ、すでに活発な自主防災活動が行われており、男女共同参画・多様性配慮の視点を導入する素地があることを考慮しました。

各モデル自主防災組織をそれぞれの市町の危機管理担当と男女共同参画担当が連携しつつ支援する体制で活動計画が形成されました。各地域の状況や課題が多様であることから、活動計画はそれぞれの自主防災会ごとに立てました。掛川市では、市民団体「東日本大震災支援掛川市民の会」の協力も得ました。

事業実施者は、必要な知識を各市町とモデル自主防災会に提供し、住民ワークショップの進行や記録、その補助を行いました。

3. 各自主防災会の活動内容

1) 掛川市大淵地区では、まず避難所と在宅での避難生活を男女や様々な状況にある地域の人々のニーズという視点から考えるワークショップを行いました。自治会役員、防災委員、PTA・保育園／幼稚園児の保護者、老人会、女性などのグループに分かれて、避難生活の不安と対策を話し合った結果を避難所マ





マニュアルに反映しました。

女性専用ルームや男女別物干し場、女性用品の女性による配布など女性のニーズへの対応について明記するほか、避難所の作業班の班長や居住組の代表者に必ず女性が加わることなど避難所運営への女性の参画、トイレ周辺や避難所全体の安全対策などの事項を盛り込んだ改定作業を行いました。

今後、このマニュアルを活用して避難所運営訓練を行い、その結果をさらに反映させてマニュアルを改善していくことが期待されています。掛川市では、平成25年度内に、大淵地区をモデルとして同様の活動を市内の自主防災会に広げていく予定です。

2) 長泉町西区自主防災会は、地区として備蓄する物資の品目の見直しを行いました。地区住民にアンケートを行い、各家庭で持出し用に備蓄されている品目を把握し、地区として備えておくべき品目について意見を集めました。その結果と、東日本大震災時の物資不足に関する情報を踏まえ、簡易トイレ、成人用おむつ、乳児用おむつ、哺乳瓶と粉ミルク、生理用品などを地区で備蓄すると決めました。

これまで、これらの物品は各家庭で備えておくべきものと理解されていました。しかし、「全員に必要なものより、性別や年齢によって特定の人だけが使うものの不足が深刻だった」という東日本大震災の経験から判断しました。

この一連の活動には、町内会長、自主防災会長と共に地域防災に熱心に取り組んでいる2名の女性も参加しました。

3) 海岸すぐ近くに立地する焼津市小川地区は、これ



地域住民へのアンケート結果を検討中 (長泉町西区)

までも熱心に先駆的な地域防災活動を行ってきた地区で、女性の防災委員が地域防災訓練を進行したり、小さな子供を連れた母親が参加しやすいよう避難場所に子どもコーナーを設けるなど、地域の人が参加しやすい防災訓練を行ってきました。

夏の防災訓練では、「人材発掘訓練」が行われました。これは、避難してきた地域の人々に自分が担える役割を自主申告してもらい、避難者各自が性別にとらわれずに得意な分野で力を発揮して避難所運営の担い手となることを促す訓練です。

冬の防災訓練では、参加者約500人が一堂に会し、町内会ごとに分かれて、地域に暮らす多様な人々の視点で避難所運営を考えるワークショップが行われました。実際に避難所となる高校体育館で、大勢が生活を共にすることがイメージしやすい状況で、どのような困難があるかを考え、意見を共有しました。中学生から高齢者まで、また男女の視点から避難生活の困難を考え共有することで、自分だけでは気づかない他者のニーズに気づいたり、対策の必要性を考えたりするきっかけとなりました。



避難所運営に関して話し合った結果を話す女性 (焼津市小川)

4. 今後に向けて

この事業は、日頃から地域の防災に取り組んでこられた多くの熱心な方々の協働により、自主防災組織が取り組むべき活動のモデルを提示できたと考えます。今後は、自主防災組織向けの研修などで本事業の経験を発信する必要があります。

静岡市版「まちのお仕事図鑑」を活かした 学校向けキャリア教育プログラムの開発と普及

塩田 真吾 | 教育学部 講師

<はじめに>

現在、子どもたちの職業観・勤労観を育むキャリア教育の重要性が指摘されています。将来、どんな仕事をしたいのか、就職を含む自分のキャリアプランを早くから考え、それを実現するために努力することは今の子どもたちにとって大切なことでしょう。

一方、こうしたキャリア教育では、「働く人」を題材とすることが多いのですが、とすると、人気のある「スポーツ選手」や「大工さん」といった、わかりやすい仕事を扱うことになりがちです。子どもたちの「なりたい職業ランキング」などを見ても、子どもたちが普段、実社会やメディアなどで見たことがある、聞いたことがある仕事だけがランクインしています。しかし、「将来、多くの子どもたちが、子どもの頃には知らなかった（考えなかった）仕事に就いている」という指摘もあるように、単に人気のある仕事の「働く人」を題材としたキャリア教育だけでは、子どもたちの職業観を広げるには不十分とも言えます。

他方、地域には様々な仕事があり、そこで生き生きと働く人がいます。普段はなかなか子どもたちの目にとまることの少ない仕事も多いかもしれませんが、人気のある仕事だけでなく、その地域で働く「その人の仕事や生き方」を子どもたちに紹介することは、多様な職業観を育む上で重要な視点であると言えるでしょう。

そこで本事業では、静岡市版まちのお仕事図鑑「コドモンデ」を制作する「NPO法人まちなびや」とともに、静岡市でいきいきと働く方を紹介するキャリア教育プログラムを開発、実践することで、子どもたちの職業観、勤労観を高め、地域への愛着を持たせたいと考えています。

<まちのお仕事図鑑「コドモンデ」とは>

「コドモンデ」とは、NPO法人まちなびやが制作し、発行する「まちのお仕事図鑑」です。静岡市の仕事を、魅力的な写真と「その人の仕事、生き方」に焦点をあてた説明文で紹介しています。



「コドモンデ」で紹介した静岡市の車の修理屋さん



「コドモンデ」で紹介した静岡市の福祉用具開発会社



福祉用具開発会社で働く人の紹介

これらの写真は、静岡市のカメラマン杉山雅彦さんが撮影しています。「劇場型集合写真」と名付けられたその手法により、子どもたちの目を引く形になっています。これまでに17号発行し、現在は静岡市の小学校に毎回2万部を無料で配布しています。



「コドモンデ」を活用したキャリア教育の様子①



「コドモンデ」を活用したキャリア教育の様子②

<「コドモンデ」を活用したキャリア教育>

本事業では、この「コドモンデ」を活用して小学校低学年向けのキャリア教育プログラムを開発しました。

本プログラムでは、対象が小学校低学年ということもあり、まずは「地域の仕事」を知ってもらうことを目的として、ゲームやクイズを取り入れて構成しました。まず、コドモンデを「仕事の写真カード」と「仕事の名前・働く人カード」にわけてシャッフルし、それぞれのマッチングゲームを行います。さらに、その仕事に関する3ヒントクイズ（例えば、お弁当屋さんの場合は、①お仕事で食べることが多いので、2年で体重が10キロ増えました。②清水の追分にお店があります。③唐揚げやハンバーグ、天丼を売っています。さて、私の仕事は何でしょう？）を行い、コドモンデをもとに、「その人の仕事、生き方」を紹介します。

開発したプログラムは、静岡市内の小学校において実践しました。授業は、教育学部の学生が担当し、小学校2年生33名を対象に行いました。

授業を行った子どもたちを対象に、4件法による質問紙調査を行ったところ、「働く人への興味・関心」について、授業前（平均3.06）と授業後（平均3.43）の結果に有意差が見られました。また、「働く人に対するイメージ」に関する自由記述を分析すると、授業前は、「大変そう」、「すごく疲れる人」、「忙しい」といった記述が多かったのですが、授業後は、「すごい」、「すごく楽しそう」、「面白そう」といった記述が多く見られました。また、授業前は、「家を作る人」、「仕事をしている人」、「がんばっている人」といった仕事に対する曖昧な記述が多く見られましたが、授業後は、「お花屋さんには霧吹きでお水をあげるなんて知りませんでした」、「（AEDの訓練もしている静岡市の新聞配達店の仕事を知り）「新聞（配達）屋さんが人を助けてい

てすごい」というような、具体的な記述へと変容が見られました。

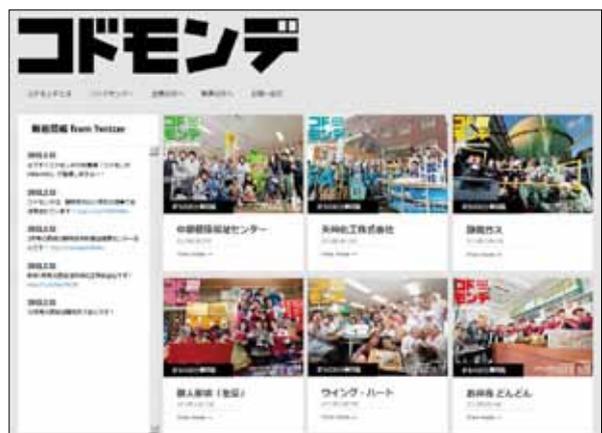
このように地域の身近な仕事を具体的に知ることは、キャリア教育の第一歩であり、魅力的な写真で構成されるコドモンデは、小学校低学年向けのキャリア教育の教材として有効であると考えています。

<今後に向けて>

今年度の事業では、まちのお仕事図鑑「コドモンデ」を活用したキャリア教育の成果を広報するために、「コドモンデ」のホームページを作成し、公開しました。

このホームページ（<http://codomonde.main.jp/>）では、コドモンデのバックナンバーを閲覧できるほか、小学校での授業の様子なども公開しています。

今後も、コドモンデを活用したキャリア教育プログラムの普及を通して、子どもたちの職業観、勤労観を高め、地域への愛着を持たせたいと考えています。



お仕事図鑑「コドモンデ」のホームページ

<http://codomonde.main.jp/>

平成 24 年度ぬまづ環境塾支援事業

水谷 洋一 | 人文社会科学部 准教授
人文社会科学部経済学科環境政策ゼミナール 2 年生

■ぬまづ環境塾・環境基礎講座の概要■

目的 広い年代層に対して環境教育を行う場を設けることで、自然と人に優しい環境を維持・改善・創造するための人材を育てる。

内容 環境問題全般について基礎から学ぶ市民向け講座。環境社会検定試験（エコ検定）の公式テキストを使い、学習ファシリテータとして静岡大学人文社会科部経済環境政策研究室の学生が中心となり進行する。

日程 9月～12月 全8回

毎回毎水曜日 19:00～20:30

会場 市民文化センター／市役所会議室

その他 6回以上の出席者には修了証を交付

本事業は、沼津市（生活環境部環境政策課）が地域共同事業として実施した「平成 24 年度ぬまづ環境塾」のうち、「環境基礎講座」の開催を支援するものでした。同講座は、地域環境や地球環境の改善・保全と持続可能な社会の形成に向けた基礎的な知識を広く習得することを目的として、「環境社会検定試験（エコ検定）」（東京商工会議所）の公式テキストをテーマごとに読み進めるという講座でした。私たち人文社会科学部経済学科環境政策ゼミナールの 2 年生は全員、7 月に同検定を受験し、合格していたことから、同講座の「学習ファシリテータ」を務めさせていただきました。

同講座は計 8 回開催されましたが、私たちは毎回 2

～3 名が交代で学習ファシリテータとなり、各回の学習内容に沿った練習問題を準備し、それを受講生に解いてもらいながら、テキストに沿って解説を加えていきました。

受講生は、沼津市の広報誌などで募集された沼津市民または市内に通勤・通学なさっている方々、22 名。私たちの親世代、あるいはその上の世代の方も多く、最初は戸惑いもありましたが、参加者の方々はとても温かく、本当に助かりました。また、参加者のみなさんの学習意欲はとても高く、平日の夜の時間帯にもかかわらず、会場はいつも和気あいあいとした活気にあふれていました。

「学習ファシリテータ」としての私たちがどれだけ参加者のみなさんのお役にたてたのか、内心とても心配だったのですが、沼津市環境政策課が実施して下さった参加者アンケートによれば、概ね高い評価をいただけたようです。「進行がテキパキしていてよかった」とか、「要点をついた学習で大変よかった」など、ありがたいご意見をいただきました。また一方、「質問に対しては後で調べるのではなく、その場で他の学生と相談してでも回答してほしいかった」や、「説明の発声の元気がない」というご指摘もいただいたことは率直に反省したいと思います。

今回、「学習ファシリテータ」を務めさせていただいたことは、私たちとしてもとてもいい「勉強」になりました。年上の異なる世代の方々とちゃんとした日本語で話すということでさえ、実は大学生活ではあま



ぬまづ環境塾・環境基礎講座の会場の様子



学習ファシリテータを務める生駒君（10/10）

りないことです。ましてや、自分がその人たちの前に立って、段取りを整えて、コトを進行するというのは、ほとんどありえません。しかし私たちが1年後、就職活動を始めたり、社会人となった時には、エコ検定の知識だけでなく、こういうことができるスキルも必ず必要となってくると思います。振り返るとほんのわずかな時間でしたが、「学習ファシリテータ」はそのようなスキルの勉強をさせていただくよい機会となったと思います。講座参加者のみなさま、沼津市環境政策課のみなさま、誠にありがとうございました。

最後になりましたが、平成24年度「静岡大学 地域連携応援プロジェクト」として本事業にいただきました助成金は、沼津市までの交通費の一部として使わせていただきました。改めて御礼申し上げます。

■受講生から寄せられた主な意見■

- ・久しぶりに勉強をしてすごく楽しかった。学生が先生になってくれたので新鮮な気持ちで学ぶことができた。
- ・数々の講座を受講しているが、受講者と教える側が同じ目線に立った進め方だったので好感が持てた。
- ・学生たちの、教えるという立場ではなく共に勉強しながら、さらに要点をついた学習で大変よかったと思う。学生たちも初々しくて好感が持てる。遠いところからわざわざ出向いて来ていただきありがとうございました。
- ・進捗がテキパキしていてよかった。もう少し声を大きく強くしてもらえるとありがたい。
- ・勉強に対する新鮮な気持ちが蘇った気がします。これからもコツコツと環境の勉強を続けていきます。
- ・質問に対しては後で調べるのではなくその場で他の学生と相談してでも回答してほしい。
- ・学生がやるのはよいが、説明の発声の元気がないので聞き取れなかったところがありました。

■ぬまづ環境塾 環境基礎講座（全8回）

	とき	学生ファシリテータ	エコ検定公式テキスト
1回	9月12日	水谷 +筒井・奥川	・講座ガイダンス ・第1章「持続可能な社会に向けて」
2回	9月19日	筒井・奥川 +山崎	・第2章「地球人としてのわたしたち」
3回	9月26日	山崎 +筒井・奥川・生駒	・第3章「環境と経済・社会」3-1
4回	10月10日	生駒 +山崎・佐藤・杉本	・第3章「環境と経済・社会」3-2
5回	10月24日	佐藤・杉本 +生駒・矢崎・松崎	・第3章「環境と経済・社会」3-3、3-4
6回	11月7日	矢崎・松崎 +佐藤・杉本・柴田・高田	・第4章「わたしたちの暮らしと環境」4-1, 4-2, 4-3
7回	11月14日	柴田・高田 +矢崎・松崎・水谷	・第4章「わたしたちの暮らしと環境」4-4 ・第5章「環境と共生するために」
8回	11月21日	水谷 +柴田・高田	・補習とまとめ ・エコ検定模擬試験の実施

静岡県沼上資源循環センター啓発施設を利用した 自然環境を学びながら親子運動教室

杉山 康司 | 教育学部 教授

藤原 綾佳・橋詰 みどり | 教育学部教育学研究科保健体育専攻大学院 1年

本事業は子供の少子化が続く我が国での子供の体力低下減少が極めて深刻であることに端を発している。低体力現象は1990年ころから急激に進み、近い将来、低体力世代が児童生徒を持つ親の世代に及ぶことを懸念されている。親子で日常生活における運動習慣を学ぶ基本的な遊び空間が必ずしも運動公園あるいはスポーツ施設に限られていないことを学ぶ機会を持ち、スポーツや体育とは関係のない地域施設と連携して子供たちの低体力に歯止めをかけることを模索するものであった。本事業において連携した静岡県沼上資源循環センター啓発施設は、「人やものを大切にすることを育む」ことを基本理念として、多くの市民がゴミ処理の問題を通して環境保護と生活改善を学ぶことができるように、平成23年5月に開館した施設である。この啓発施設において大気汚染や植生などが自身の運動あそびや健康づくりに密接に結びつくことを親子で学ぶことで子供たちの運動機会を促すのみならず、親の環境への取り組みと健康問題への意識改善が期待できるのではないかと考えられた。

<プロジェクトの目的>

本事業は身近にある環境問題を学びながら、私たちの健康には自然の豊かな力が必須であることを学び、私たちの身体機能低下が環境に大きく結びついていることを親子で実感し、その後の親子でともに楽しむ運動習慣と環境保護活動を促進させることを目的とした。

<募集方法>

啓発施設では市内全小学校を対象に啓発事業を行っているため、本事業においても静岡市の全小学校に案内を掲示および配布した。また、HPにおいても案内を掲載した。申し込みは啓発施設事務に直接電話する方法で受付けた。

<参加者>

本事業の参加者は8組の親子であった。親は夫婦の参加が2組、祖父母の参加が1組、父親との参加が2組、他は母親の参加であった。

<プロジェクトの内容>

本事業は全2回の教室を低学年児童親子を対象に参加者を募集し、平成24年度10月27日（土）および12月8日（土）にそれぞれ開催した。第1回ではこれまでの子および親の環境及び運動に関する意識、習慣についてのアンケートを実施し、第2回では第1回からの意識の変化および教室で紹介した運動遊びや担当者への評価についてアンケートを実施した。アンケートはいずれも親および子について行った。また、第1回は親が啓発施設を学ぶ時間を設け、第二回は子が自然環境について学ぶ機会を設けた。さらに、親子でできる運動遊びのほとんどが身近にある物や捨てる前にひと工夫して遊べる内容とし、施設のコンセプトでもある4Rの内3R（Reduce, Reuse, Recycle）の実践に努めた。

第1回の教室内容（9：30～11：30）

☆事前アンケート

- 9：30 はじまり 教室趣旨説明とお姉さん先生、お兄さん先生（大学院生、大学生）紹介
- 9：35 親子ストレッチ、からだづくり運動（担当：橋詰、藤原）
- 9：55 子供の時間（自由遊び）（担当：橋詰、藤原）
親：腹式呼吸について学ぶ（担当：杉山）
- 10：05 体力テスト（担当：橋詰、藤原）
☆風船ふくらませテスト
☆スーパーボールいれテスト
☆バランステスト



親子で風船膨らまし体力テストの様子

- 10:30 大人の時間（啓発施設の紹介とリサイクルについて）（担当：重岡）
- 10:45 ノルディックウォーキングで施設周辺を親子で散策（担当：杉山）
- 11:30 終了 次回の予告と宿題（お土産としてスーパーボール、ビーチボール、テニスボール、風船を持ち帰り、親子や近所の友達と遊んでみる）

第2回の教室内容（9:30～11:30）

- 9:30 はじまり（本日の教室紹介）
- 9:35 新聞紙を使った親子ストレッチ、からだつくり運動（担当：橋詰、藤原）
- 10:00 体力テスト（前回より沢山できるかな？）
 ☆風船ふくらましテスト
 ☆スーパーボールいれテスト
 ☆バランステスト
- 10:20 ノルディックウォーキングをしながら自然環境を学ぼう（担当：重岡）
- 11:00 ブローライフル（担当：橋詰、藤原）
 ～親子対抗アキュラシーゲーム～
- 11:30 閉会の言葉（担当：杉山）
- ☆事後アンケート



ブローライフルを楽しむ参加者

<今後の取り組みと課題>

本事業は運動施設を利用しない他分野の施設において運動と健康を保健体育の分野以外とタイアップさせた初めての試みであった。実技のプランニングと指導は大学院生が主となり開催した。補助として生涯スポーツ専攻学生も加わり、実施したが、特に第一回は対象者の顔が見えない状態であったので万全の準備をする必要があるなど学生にとっては大きなチャレンジでもあった。プログラムを実際に指導しながら感じたことや担当アンケートの結果を踏まえた改善点をまとめる以下通りである。

1. 継続的に講座を開き、環境や運動に関する意識を持続させる。
2. 単発で参加しても、楽しめる内容にする。
3. 環境や親子での運動教室に興味を持たない人にも参加をしてもらえるプログラムを考えていく。

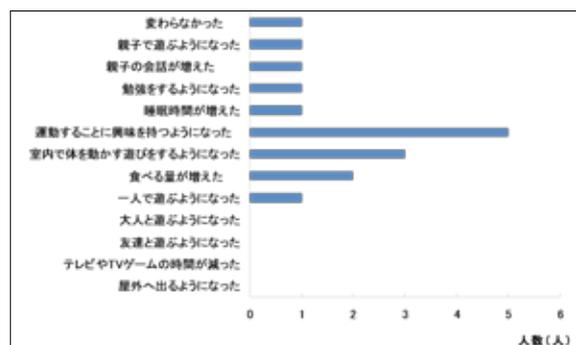
これらの他、アンケートの回答結果から本事業で用いた運動教材については非常に良かったという評価であり、また参加したいとの声が大多数であった。また、親のアンケートから啓発施設は知っていたが、実際に説明を受けゴミ処理について学ぶことができたなど、親子でゴミの分別について改めて考える機会が提供できたという結果が得られた。啓発施設からも、本事業参加者の様子や学生の取り組み状況から、事業の成功と今後も連携を行っていく価値ある事業と評価された。



ノルディックウォーキングをしながら屋外で植生について学ぶ



親子ノルディックウォーキング風景



事後アンケートの結果（子供の意識変化）

発行日 平成25年4月
発行 静岡大学 イノベーション社会連携推進機構 地域連携生涯学習部門
編集 高村 知世 | 研究協力課研究支援係
連絡先 〒422-8529 静岡市駿河区大谷836 静岡大学学術情報部研究協力課研究支援係
☎054-238-4317 E-mail: ochiiki@ipc.shizuoka.ac.jp
ウェブサイト <http://www.lc.shizuoka.ac.jp/>

※ 新聞記事は、静岡新聞社および中日新聞社の許諾を得て転載しています。